

赤軍

No. 6

何から始めなければならぬか

——前段階蜂起敗北の教訓と

世界党—世界赤軍建設——

共産主義者同盟赤軍派

。我々は何から始めなければならぬか

——前段階武装蜂起、その敗北の

三つの教訓と我々の任務

〈I〉敗北的教訓と我々の任務設定

〈II〉防禦から対峙を調節せしめる前段階武装蜂起

——世界革命戦争の戦略図

。「蜂起の軍隊」は如何に建設されて

いかねばならないか

——中央軍はどの様に建設されてきたか

〈I〉前段階蜂起へのジグザグと〇〇武装占拠の決断

〈II〉党—軍—革命戦線

〈III〉蜂起の軍隊建設

。獄中—法廷に公然たる武装宣伝をノ

〈I〉我々の到達した地平と獄中同志の位置

〈II〉獄中—救対活動—そして裁判は如何に在るのか

我々は何から始めなければならぬか

——前段階武装蜂起、その敗北の三つの

教訓と我々の任務

〈I〉敗北的教訓と我々の任務設定

我々は「前段階武装蜂起の唯一、世界的規模での永続性」という観点から、今秋前段階蜂起の敗北の総括を検討してきた。

勿論、この総括観点の前提には、次のことが確認されていなければならぬ。

即ち④前段階武装蜂起の客観的成熟と、その一国的武装勢力の拡大の限界、⑤前段階武装蜂起を成熟させた、世界的経済、政治、世界武装プロレタリアートの成熟度等を基礎とする。世界階級危機の性格からして、前段階武装蜂起の永続性は、目的意識的な国際政治、軍事勢力の「一國」への取り込み、結合、一國の階級関係の国際的拡大に、その形成—生産の根拠をおいていること、である。

そして、このことを中心環として、我々は以下三点の総括的結論を得た。
(1)「前段階蜂起と国際根拠地の相互実現とこれを通して世界革命戦争の実体的推進」

世界革命は何らの原則一般でも、或いは他國の「左翼」に期待することでもなく、スタ官の裏切りを弾劾することでもない。原則主義、一般性は現時点以降、完全に一國主義であり彼らの世界革命戦争の理論的不確心、一國主義、自然成長論の暴露であり、「世界同時革命、世界革命戦争」とは唯一、「我々による「世界革命戦争の戦略」の確定に基づいた、我々の世界各國に於る「前段階武装蜂起—世界革命戦争」、世界「党—軍—革命戦線」の獲得の闘いである。

(4)「国際根拠地と結合した蜂起の軍隊建設」
蜂起の軍隊は、「自らの蜂起を、世界革命戦争の段階と戦略的構造の位置を自覚した上で、国際根拠地建設闘争と一体となって獲得されること」
革命の軍隊（世界赤軍）は、国際根拠地と結合した武装蜂起の軍隊からのみ成長する。
(5)「生半可な、半合法の半一國主義的組織論では、大衆闘争の延長線に軍事闘争を接木することしか出来ないし、決して蜂起をやり遂げることは出来ないこと。」

合法的改良闘争とは、完全に分離し、プロレタリア、大衆と、即自的に結合するのではなく、唯一「蜂起—世界革命戦争」の質をもった闘争に於いて、根底的に結合を成し遂げる、世界的単一の地下政治軍事組織からのみ、世界党は形成されること。

それ故、我々の党活動は、⑤国際根拠地建設を環とする、世界各國に於ける蜂起の軍隊建設、⑥蜂起の軍隊建設の諸活動、敵軍隊を解体する活動、の、この④⑤に党活動の基調があること。③この国際根拠地獲得、世界各國に於ける蜂起の軍隊建設に向けて、④⑤に従属的に、諸々の、合法、半合法の改良闘争を組織する活動が獲得されることが、なければならぬ、以上三点である。

4、以上の「前段階武装蜂起の永続性」を媒介する「三つの環」の意義は、過渡期世界—攻撃型階級闘争の核心点である。①現代帝国主義—過渡期世界の「反革命—侵略抑在戦争に向けての、世界的、同時的、累積的危機」世界階級危機、②前段階武装蜂起—世界革命戦争、③世界「党—軍—革命戦線」を、現実の地上の実践に突き出させる。媒介環でもある。又、これらは、我々の、現実的实践に、接近せんとした一貫した問題意識、過渡期世界の革命の「世界性と一國性」「党と軍事」の永続的矛盾、「党建設—党の改組」を具体化する基本線でもある。

我々は、明確に、「前段階武装蜂起—世界革命戦争」の貫徹の必要性、軍隊建設、世界党建設の意義を自覚しながらも、結局

①蜂起を、如何に世界革命戦争（次の前段階蜂起）に永続せしめるかに、無自覚で、事態が一国的武装勢力では、蜂起を永続化し得ないことが明確になりつつあった最終局面に於てしか、「蜂起の世界的永続性—国際根拠地建設」に

ところで、六一八派の動向はどうか。彼等は相互に、「勝ったか、負けたか」「誰が戦勝的であったか」で争っている。未熟な総括方向の相異はあれ、階級闘争の壁を真に突破する教訓を引き出し得ていない限りには、全く同床である。

だが同時に、従来の「新左翼」の戦闘性は、大きく左右への分解を開始し始めていることも確かである。これ等の過渡的分解は、現在中核派の如く、労働者の「ビンゲバ軍団」を加えての、正面戦の堅持の路線をとる傾向と、「ビンゲバ軍団」の正面戦を右翼的に回避した、関西B、B.L派、M.L派等「遊撃戦—ゲリラ戦」の路線をとる傾向のグループ、そして、第二のグループと結合しつつも、「情況—叛旗」、青解、構改革系革マル派に至る、「生産点ゼネスト(マッセストでもいい)にゲリラを接木」する傾向のグループとして構成されている。

かかる、新左翼の過渡的分解過程は、この七〇年四、五、六月を経て、最終的に、我々を中心とする、武装蜂起—戦争派と「マッセストにゲリラを接木する」生産点主義人民戦線左派に分解し切ることが必然である。何故ならば、七〇年四、五、六月をめぐる権力との攻防過程は、ビンゲバ軍団の、正面戦—ゲリラ戦にせよ—例えそれが、「労働者人民への一定の拡大」あるいは「軍事技術の技術主義的強化」を補完するものであれ—再び権力の布陣の規模と質に抗すべしなことを鮮明化するからである。この権力に対する、政治的軍事的武装が、「前段階武装蜂起と蜂起の軍隊」か、右翼的に「生産点に潜入」か以外にないからである。

中核派は、「労働者の武装—爆弾時代の到来—技術的強化」で、彼等なりの勝利の基準を提起している。我々は、彼等が、現在の階級闘争の壁に對して、真正面から、「新左翼」の戦闘性を継承しつつ突破せんとする姿勢を評価する。そうであるが故に、それは、最も鮮明な「拡大の道」であることを指摘せざるを得ない。現在の壁には、「労働者人民の拡大とその一定の武装」のみでは決定的に不十分であり、「爆弾時代」が何んの激動も媒介にせず到来するわけでもなく、それ故に技術の深化—一般では、爆弾すらも使用し得ないこと、結局「ビンゲバ軍団」の完全な敗北に終らざるを得ないのである。そして、その敗北は、中核派の組織的解体を招かざるを得ないのである。問われている

のは、「七〇年代の世界革命戦争に引き継がれる前段階武装蜂起」の党としての、「党から活動家層、大衆」全体に対する路線とその「政治的、軍事的、組織的準備」である。

BUND内、関西BUND派、B.L派や、M.L派等は、中核派の如く、左から事態に間違つて対応せんとしているのに対して、右から間違つて対応せんとしている。

彼等の「遊撃戦—内戦主義」が、この対応を鮮かに物語っている。M.L派は、何んの基準もなく、「勝利した」と主張している。彼等は「人民戦争」路線を闘争基軸にしているから、恐らく、「蒲田署の攻撃」をもつて、「勝利」と称しているのかも知れない。だが、かかる「人民戦争」論をかきまわる裏面には、「毛沢東—戦争論」の右翼的経済主義的理解と、他方での敵権力との正面から対決を回避した、大衆並みの「遊撃戦論」への右翼的変質がある。「大衆操作の攻」で何んとか今秋闘争の破産宣告をまねかれたが、七〇年闘争は、そのような操作主義を許しはしないのである。

そして関西BUNDは、前段階蜂起を最終的に欠落させ(④)「革命の軍隊、党の革命」参照)、「過渡期世界論—攻撃型階級闘争」の核心を骨抜きにすることに執心し、ほぼ、M.L派の動向を論理化する位置にまで転落してしまっている。

「内戦が自然発生的に形成され、いつのまにか世界革命戦争に発展される」かの如く願望されている。その意識性は「内戦の軍隊」と「軍事を指導する党への党の革命」が必要であるということである。「権力問題—前段階武装蜂起」が捨棄された場合、過渡期世界論が、陳腐な軍事力主義者如何に創り出すかの最も典型である。

「革命の軍隊」は「蜂起の軍隊」であり、内戦一般の軍隊ではない。先進国(後進国でもそうであるが)で、現象的に、内戦という型態をとうとうとも、それは一般に、蜂起と蜂起を結節する時期に於いて考えられるのであつて、蜂起抜きの内戦主義こそ、最も日和見主義なのである。

党は、その「蜂起の軍隊」に對して、蜂起の一國性と非永続性を突破すべく、次の前段階蜂起(世界革命戦争—内戦)に向け、「労働者国家」を世界革命根拠地国家に転換せしめ、帝国主義諸国内部に於いて、無数の前段階武装蜂

起を闘いとるべき指導を行なわねばならないのだ。

「前段階蜂起の貫徹」に内在する、「蜂起—革命」の「世界性と一國性」「党と軍事」の矛盾は、かくて止揚されるのである。

彼等は、党の革命の基準を一体どこにおいているのだろうか。正に、関西BUND、M.L派等こそ、最も典型的に高次の自然発生的に拝跪したグループなのだ。精神主義と(啓蒙主義)と大衆操作主義は、彼等にあつて、極度に歪小化され、変質されるだろうし、国際主義—世界革命戦争は、全く口先だけのものとなり、最も卑劣な一國主義者に変質するのである。何故ならば、「前段階武装蜂起」の追求をもつて、初めて「国際主義」の何んたるかを理解され、攻撃型階級闘争の核心が「前段階蜂起と国際根拠地」にあることも理解されるのである。

そして、国際主義の放棄は、「内戦主義」の破産を経て、彼等が本年九月頭初主張していた「マッセスト武装行動隊」として、「マッセスト」に「軍事」を付加する、現代のサンディカリストに行きつくのである。

彼等は「権力問題」が理解し得てないのであり、従つて、「国際主義」「軍事問題」は、全く理解されていないのである。

青解、構改革—情況—叛旗、革マル派は、何んの矛盾すら感じていないことには、先進的活動家グループである。

我々は彼等に、革命戦線での諸活動の任務を全うしてもらおうではないか。

〈七〇年闘争と前段階蜂起〉

マス・コミは、七〇年六月、安定期限切れをめぐって、一大闘争が起るかの如く予測している。六〇年安保や、或いは今秋決戦の再現を政治過程主義的、大衆運動主義的に考えるジャーナリストには、来春—六月闘争がこのようにみえるかも知れないが、日本—世界階級闘争は、彼等の予測をこえよ—根底的な次元に突き進みつつあるのであり、決してこのような事態は起こらないだろうし、起こしてはならないのである。かかる今秋決戦の二の舞を、七〇年に再びおこなうならば、日本階級闘争の革命的飛躍は、極めて展望を暗くするものである。全共闘活動家層や反戦労働者層は、今春武装蜂起に向けた戦列に自らを再編しなければならぬ。そして、このことを最もよく理解しているのは全共

闘活動家層である。そして、敗北の関係の中で追いつ込まれながら、反抗を開始しつつある労働者に自らの階級への憎悪を自然発生的に爆発させることを戒しめさせなければならぬ。彼等に来秋の武装蜂起に向けての隊列を作らざることを要求しなければならぬ。決して学園闘争の如く、大学白晝—街頭武装闘争—として、労働者の闘いは自然発生的に昂まらぬのである。部分的な山猫ストは、不用意に何んの準備もなしに引き起こされた場合、権力のレ・パとロックアウト体制の下に、完全に粉砕してしまふであろう。指導部と、蜂起の準備なしの闘いは、学園闘争の伝統と指導力にくらべ比較にならないものであるが故に、権力と社民の二重包囲の下に分散的にたたきつぶされてしまふのである。

我々は、七〇年来春闘争に對して、中核派の如く、武装蜂起抜きの大衆運動主義的な軍事闘争を追求する路線を断乎として粉砕してゆかねばならない。我々は、来春闘争を首尾一貫した来秋武装蜂起準備運動として貫かねばならない。大衆闘争から過渡的な不用意な何んの準備もなしの軍事闘争に突入することを断乎として拒否しなければならぬ。我々には中途半端な軍事闘争に對して、首尾一貫した来秋武装蜂起を貫徹する準備を「平和的デモンストレーション」を對置し、その先頭にたたねばならぬ。労働者人民大衆に對して蜂起の訓練と全ゆる準備を行なわねばならぬ。とりわけ、このことは、急速に敗北的關係の中で追いつ込まれながら成長しつつある。労働戦線の戦闘化に對して、最も目的意識的な指導が施されねばならない。戦闘的學生層の大多数は、我々の主張していることを、くもくくもく自覚するのに対して、労働者層は、未経験で戦闘的であるが故に、ねばり強く説明し、説得する必要があるのだ。

①日本(西徳)労働者国家(キューバ、北朝鮮、北ベトナム等)の日本前段階武装蜂起の同時的遂行、これにともなう同盟の世界党化、当効諸国での計画的諸準備、八月世界革命左派協議会の実現、等。②全国都道府県、地区、工場、学園への中央集権的な地下組織体制。③数千の規模を目標とする蜂起の軍隊建設の系統的なプラン形成とその実行。④自衛隊への介入と反乱の準備。⑤革命的裁判闘争をもつての獄中外部同志の連帯した、蜂起の呼びかけ、闘争及び革命的同志の武装奮闘⑥革命戦線を全国的に形成し、蜂起の汎ゆる兵站線を

確立し、革命戦線は、労働者人民大衆に、蜂起とその準備を呼びかけ他党派とその層を十一月蜂起に向け再編成する。革マル派の打倒と六一八派の分解は革命戦線の最も中心的な任務である。我々は、以上の任務を第一期(11月)から第二期(4-7)、第三期(8-9)に向け準備し、実現し闘かねばならぬ。蜂起の観点から、運動組織戦術を定めることは、今程重要になつていない。現在の指導部を活動家大衆の混乱は唯一、武装蜂起という水準と、ここからの運動組織戦術の貫徹に於いては止し揚し得ないのである。中核派の如く、蜂起を抜きにして、軍事闘争の追求を主張することは、全く無責任である。又、革マル派の如く蜂起の追求を前提としない、事態の核心を避け右から闘争の足を引く張ること、全く言語不問である。或いは、B連合派や、ML派の如く、事態の困難さを自らの無能力不決断を隠蔽し発言停止する潮流は、組織ではない。この諸派の米春闘争に於けるシレンマを克服する道は、唯一武装蜂起を今秋に貫徹すべく全人民的武装蜂起体制を確立することにある。

我々は大衆闘争の自然発生的爆発を断乎として「今秋武装蜂起貫徹」という視点と実際の諸活動を闘つて、左から抑えることに意識的にならねばならない。平和デモンストレーションの貫徹の中で、全人民を蜂起の部署につけてゆかねばならない。全ゆるの団結が米春でもって蜂起貫徹に向け再編され、今秋決戦の如く、無自覚のままに闘いに突入することを避け、過去の無自覚な団結を避けねばならない。レーニンとボルシェヴィキはロシア革命の父中、一九一七年七月に革命闘争の自然発生的武装蜂起への転化を抑えるべく、平和デモを提唱し、労働者・人民を計画的準備の戦列に再編した。彼等はアナーキストと壮烈な分派闘争を行いつつ、平和デモの戦列に立つたのである。責任ある武装蜂起の党であるボルシェヴィキは、いまだ武装蜂起の主客に於ける未成熟が爆発した場合、革命の挫折に及ぶと判断したからである。この革命的党派闘争を媒介にして、労働者大衆は、蜂起の計画性を学び十月蜂起、コルニーロフ反乱を打ち破り、勝利したのである。我々は必ずしも、レーニンとボルシェヴィキのとつた七月の平和デモンストレーションの戦術が正しいとは思つていない(赤軍 No 1「マルクス主義と蜂起」参照)。何故ならボルシェヴィキは、未だ完全に武装蜂起で再武装されていなかったし、七月危機以降大規模な分派が襲ってくることも予測していなかったのである。彼等は具体的な武装蜂起

の貫徹との関連で、七月危機に無自覚的に対応したのではなかったからである。それ故に、一時的には七月危機以降、ボルシェヴィキはツアアの集中強圧と、大衆からの批判をうけ、危機をむかへたのである。我々が学ばなければならぬのは、権力闘争の段階に入った場合、敵との対抗関係のなかで、党の蜂起の準備との関連で戦術を定めねばならないことの意味である。十一月前段階武装蜂起の追求は正しく戦術であった。だからといって、避けられない対決に、党が絶対にしりごみをしてはならない時もあるのである。これは不可避の対決であり、これを契機に、労働者の成長が十年が一日にあたる成長を遂げ、社会的契機を内包し、主体的条件如何によつては、前段階武装蜂起が主客に於いて連続する契機があつたのだ。勿論それは、我々の蜂起後の教訓を加えてのことではあるが、又これは7/6による同盟の分派闘争への「不完全な勝利」と我々の未熟によつて極めて主体的に制約されていたものであるが、我々は、中核派の「六月武装決戦」の言葉だけの、空文句の、無計画、中途半端づくめの路線に負担するわけでもない。或いは、前段階蜂起を遠い未来か二三年先の問題に引き延し、日和見主義、中途半端性を隠蔽しはしない。我々は七〇年来秋を前段階蜂起の時期と設定する。我々がこのように判断するのは、第一には、国際政治過程に於いてである。個別政治闘争の如く一国的政治過程に於いて、我々は蜂起の時期を設定するわけにはゆかない。来秋10/21を軸とする動向こそが七〇年の階級関係のプロレタリアの焦点であるのだ。又、十一月決戦もって敗北的に開始された、権力闘争は挫折を知らないし、挫折があつてはならないものである。闘争の波は、国際的政治過程に媒介された、敵権力と党派の計画的対時関係に入つてより、党派の計画的準備に媒介された場合、彼らは絶対の退かないものである。これは次の世界革命戦争の対時段階に引き上げられ、攻防に向けての基本条件を獲得するところの革命的敗北を経過しないうち、戦闘力は持続するのである。革命的敗北でない不完全な敗北(その意味で完全な敗北は、その、残存し拡大し始めた戦闘力を七〇年に爆発させねばならない)であり、決して七二年などがめざされるべきではないのである。ただた、米春闘争に於いて、不用意に戦闘が持続されるならば、敗北は個定的関係に入るということがある。先進的層、党派の狙い打ち的破壊、工場未端での敵権力の

制圧として、再建は極めて長期の困難な性格となるのである。全共闘の活動家層が述べている「闘う決意は十分ある。だが、いままでの繰り返しても駄目だ」という、この質の戦闘力に、全労働者人民のそれが引き上げられねばならない。第二に、これこそが中心であるが、正に第一の階級関係にあるが故に、唯一蜂起を準備する、我々赤軍派の、蜂起の準備との関連で、全ゆる戦線は武装蜂起体制を整えねばならないのだ。

我々と先進的な全ゆる層が、計画を準備し切る地点は、七〇年秋以外にはないのである。全ゆる革命的層は、我々に結集し、我々と共に武装蜂起を準備し切るには、未だ、その準備期間が長いことをはっきりと覚えておかねばならない。国際的、同時的な全ゆる革命家と、先進的層、大衆に於いて武装蜂起に向けての、理論的・政治的・軍事的・組織的準備が必要なのだ。そして、この準備こそ我々の敗北の教訓に従つて新たな質に於いてのみ準備されるものなのだ。

以上の我が同盟の問題設定を党的に把え直し、権力の激烈な弾圧に抗し、党派闘争を展開しつつ、全戦線を七〇年秋武装蜂起に再編成するには、第一に、何故に前段階武装蜂起が成熟し、それは、如何に永続されるかについて、我々の今秋段階武装蜂起の教訓を、革命論的次元に引き上げつつ獲得し切ることであり、第二に、これを踏えることによつて七〇年前段階武装蜂起の位置を、「世界階級闘争」国際共産主義運動の総括を踏えることによつて、確定し、第三に、七〇年前段階武装蜂起を、「現代帝国主義」過渡期世界」の世界階級危機の指針を通して、世界プロ独に到る、実態の世界革命戦争の戦略図を確定することから位置づけ直し、第四に以上を踏えつつ、七〇年前段階武装蜂起をめざしての、国際的「地下組織」の具体的な計画を明らかにすることである。現在、展開されつつある党派闘争と七〇年闘争方針の確定は、上記のような問題設定と、その正しい結論を通してのみ止揚されるのであり、又我々も又、かかる内実に於いて武装し得ない限り、この不毛な分派闘争に革命的介入し入しない限り、全党派を牽引することはできないのである。

＜I＞ 我々の教訓—その内的連関

＜I＞ 前段階武装蜂起—国際根拠地」「蜂起の軍隊と軍事問題」と国際的地下組織との革命的連関—攻撃型世界革命の核心

我々には、今秋前段階蜂起の敗北の過程での前段階蜂起「革命をめぐる」世界性と「一國性」「党と軍事問題」の矛盾、党の改組の問題を次の如く教訓化した。

①前段階武装蜂起の貫徹とその技法は、④国際的革命的な政治軍事勢力との実際の結合の準備、その中心意としての「国際根拠地獲得」にあり、後者の準備は、前者の準備と切り離せなく、前段階武装蜂起と国際根拠地建設は、同じ事柄「世界革命戦争」の二つの側面であり、一個二重の関係に立っていること。②換言すれば、先進国前段階武装蜂起は後進国革命戦争、労働者国家の世界革命根拠地国家への再編に向けての、全社会的、全人民的分派闘争の結合環であるばかりでなく、同時に後進世界プロ独に向けての、世界革命戦争勝利に向けて、互かに単一に一体であること。③更に言い直せば、前段階蜂起を貫徹する主体は、「自国の前段階蜂起を準備すること自体が、他国、他プロ独の世界革命戦争へ向けての準備と一体同時併行的に行うこと」が必要であり、当初から世界革命戦争を担う準備を萌芽的であれ実際に国家、地域を越えて行っている主体として存在しなればならないこと。④即ち、前段階蜂起を担う主体は、その蜂起が三プロ独階級闘争の結合環であるが故に、他プロ独の主体以上に、決定的に実際に世界的である為に、世界プロ独に向けての世界革命戦争の具体的、実際の戦略図の獲得の下に、世界的戦略配置図を確立し、それに従つて世界的配置を現に獲得し、自国の前段階蜂起の準備とその勝利の永遠性を、このなかに定める必要があること。せんじつめれば、武装蜂起の計画性は、唯一世界プロ独に至る世界革命戦争の、実践的、世界的計画性の一環としてのみ、唯一実現されてゆくということがある。この世界的計画性

は、過去の段階での抽象的世界性、原則上の問題として強調しているのではなく、世界革命危機が具体化し、階級闘争の「世界性、軍事性、共同性」が、現に具体的な攻防、世界的攻防「軍事問題」としての、換言すれば、世界革命戦争の防衛段階での、各国的、各プロットの「分断」され、実践上、軍事上、計画性の一面的レベルに制約され、世界的レベルではこれを考え切れず、抽象的次元に留まっていた段階とは異なる、世界革命戦争の対峙段階への飛躍への過渡としてこの飛躍を通して、対峙から攻撃へ導く計画性としてのである。だから、我々が「国主義者であったことを意味しない、我々が最大限世界革命主義者であったが、この世界性の質が、各国的各プロットに於いて権力問題としてそうであるが故に、世界革命の主体が、その世界革命戦略を、世界的な有機的連関をもった戦術問題「軍事問題」としての形態転換していることに無自覚である場合、そして過去の抽象性に於いて満足する場合、口先だけの国際主義者「実際は」一國革命論者「社会排外主義に転落して行くのである。このことを具体的に示せば、次のような事例で最も明らかである。米大統領選をめぐる反戦闘争の拡大強化に向け、ベトナムがサイゴン攻勢を行ったこと、或いはソ連「虐殺事件」で、米、ベトナム人民が共同して「パクロ」にあたること、或いは、今秋安保決戦過程で、米10/13と日10/21、10/21と米11/15、11/15と日本11/16、17の呼応関係、勿論これ等は権力闘争の質をもった計画性にゆめあげられていないことに於いて、従来の国際主義の頂点であられ、その域を突破しているものではない。正に必要な世界的計画性とは、これ等の、日、米に於ける前段階蜂起の呼応、同時的遂行の準備、労働者国家のこれらの支援、ベトナムのサイゴン攻撃、安保NATO再編強化粉碎武装蜂起貫徹を掲げて実践化される、世界革命戦争の党主体に指導された計画性である。④以上のことは前段階武装蜂起の貫徹は世界プロットに於ける世界革命戦略の確定とそれに向けての党の世界的準備の一環として準備され、初めて可能であること。

②④階級攻防に於ける銃火器・爆発物使用をもった任務貫徹をめぐる種々な軍事問題は、前段階武装蜂起の計画の一環であり「武装蜂起の貫徹」という政治上の武装と切り離されては存在し得ないこと。③かつ、武装蜂起に於いて、軍事問題はその中心環であり、それを最も先駆的、前衛的に担う軍隊は、

に大衆との日常的大衆闘争の次元での結合の誘惑を不決断に拒否し得る性格のものではない限り、地下的であることは出来ぬ。これは、国際的組織として、蜂起をめざし、蜂起の軍隊建設に於いて、労働者、人民と対目的草莽的に結合しているからこそ可能であるのだ。②「大衆運動の延長線上に普通の接木」する党派に於いては、それが当然の帰結として一國的組織であり、蜂起を追求し得なければ徹底した地下組織にもなり切れずこの悪循環こそが常に中途半端な闘争と完全な敗北を引き起こすのである。

Ⅰ 前段階蜂起の根拠とその性格——スターリン主義

20050

以上の①②③④の内的連関は次のようにまとめられるのである。

①即ち現代帝国主義「過渡期」世界は、反革命「侵略抑圧戦争」全面的体制間戦争へ向けての「権力—国際関係」をめぐる、特異な前段階武装蜂起の階級的危機を形成すること。それは攻撃型世界革命論に武装されていない一國革命「受動型革命論者」に「前段階武装蜂起の客観的成熟にも拘らず一國主義的指導に於けるその非水統性」のディレンマに達させ、大衆の高次の自然発生性に振り舞われつつ、最終的に、人民戦線左派生産主義に転落せしめる。この転落過程は次の如く構成されるのである。その第一は、前段階武装蜂起に対して、全く曖昧な評価をとること。内乱の状況（中核）、人民戦線（M.L.）前段階階級決戦（関西B、B・L派）等、以上の曖昧な態度こそが、人民の隊列に最大の混乱をもたらすのであり、軍事問題或いは大衆闘争（合法・非合法闘争）に対して、或いは「組織的防衛」に全く無原則的な対応となつて現れ、かつ、軍隊建設「軍事技術」非合法的諸技術を、技術として徹底することに十分となるのである。

そして、事態の敗北的要因を、「軍事問題」や「非合法技術」に専念すればいいという、全くの技術主義的要因に解消してしまうのである。その第二は、かかる技術的要因に解消してしまうのである。その第二は、かかる技術的要因では、突破し得ないことが厳然たるや否や、結局「生産点でのヘゲモニーをつくり出す」運動を拡大する必要がある」という、全く陳腐な結論に落ち

革命の軍隊一般として、或いは党直轄の地区から離れた部隊の規模では不十分であること。我々にとっての、党直轄の革命の軍隊とは武装蜂起の軍隊であり、決して遊撃戦「内戦」の軍隊ではありえないこと、ゲリラ軍も又、蜂起を貫徹する計画と配置の中に位置し、その任務が定められること。③それ故に、武装蜂起の軍隊は、党の、世界革命戦略図に従っての、世界的準備活動の前進に規定されるものなのである。④階級攻防の貫徹は「ゲバ、棒」に「ビンゴ」での限界は、実は世界革命戦争としての前段階蜂起の貫徹によってのみ、世界革命根拠地と結びついた世界赤軍の萌芽としての蜂起の軍隊によってのみ、銃火器の使用「機動隊のセン誠」首都、中枢制圧等は可能である。それ以外の「遊撃戦、ゲリラ戦」の軍隊では勝利し得ず、銃火器の使用すら出来ないこと。「武装蜂起の貫徹」で武装された軍隊以外には「ビンゴ、ゲバ軍団」の技術的卓越性に於いては、完全な限界をもっていること。絶対に勝利することはできないこと。問われているのは、武装蜂起の軍隊の銃火器を使用し得る諸技術である。⑤蜂起の軍隊は、敵との自覚的闘争に立っている以上自らの存在は蜂起の貫徹以外に無く、と同時にその貫徹に向けての国際的「国内的活動」そのものは、その活動主体そのものが敵から味方を防衛し地下活動を前提としている。活動そのものが急に一個二重の性格であること。かつ蜂起の軍隊に於いてのみ、大衆との即自覚的結合の誘惑を拒否し、根底的に大衆と結合すべき諸準備を地下活動としてなし得るのである。

④「武装蜂起を唱え、蜂起の軍隊を所有する組織は、その日常不断が敵権力階級と戦争状況にあるのであって、その党組織の存在は、その組織が目標とする、任務の貫徹をし得る党活動の性格に起因するので故に、実際に国際的に存在しなれば戦略的に永続することは有り得ないが故に、敵の一國性の弱点に対して、プロレタリアートの世界性の戦略的強みを保持した組織でなければならぬ。ここからのみ前段階蜂起を貫徹する世界性の屈服を克服し「軍事」と蜂起」に於いて結合し得るのである。⑥と同時に、我々の組織は、武装蜂起を宣言しそれを現に準備していることに於いてありとあらゆる権力の反革命を日常不断に受けるのであり、それ故に常に我々の組織は地下的な存在においやられるし、実際そうしなければならぬ。そして、このような徹底した非合法の地下組織が存在し得る条件は卓越した技術を必要とする。だが、それ以上

着くのである。かかる無基準なブラグマチックな対応に、そしてこのジレンマに全く対応し得ないのは、結局は前段階武装蜂起とその世界革命根拠地国家創出闘争との結合のなでの永続という、事態の根本的止揚の方向を獲得し得ない一國革命主義に根底をおいてののだが、これは、もう一歩ついでに進んで考えれば、彼等が第一に革命情勢を評価する科学的基準（現代帝国主義「過渡期世界」をもっていないが故に、特異な国家間関係「権力再編」から引き起こされる「前段階蜂起の成熟」が理解し得ないこと。それ故に、かつ、それを「勝利的に永続し得る」展望を獲得し得ないこと）にあり、第二に、このことと不可分であるが、依然としてスターリン主義の問題を革マル流に裏切り史観の次元でしか把握できないことにある。

これ等のことに於いては、後述することにして課題に尽せよう。「前段階武装蜂起、後進国革命戦争、労働者国家、全人民的分派闘争」の統一した、世界単一の政治的軍事的組織の準備が理解されず、曖昧にされ蜂起を軸にした党活動の基礎を、大衆との即自覚的結合に中心をおいた対応に迫りやられ、軍隊は、銃火器の装備と使用訓練をし得ない「内戦や反包囲討伐」の右翼日和見主義的「軍隊」に転落し、その戦術は大衆闘争の延長線上（それも、一國的政治過程の「それ」に設定され、組織は全く曖昧な半合法的性格に迫り込まれるという）にある。

我々は、来秋前段階武装蜂起に対して、アレコレの大衆闘争の戦闘性で党派性を競うことから完全に決別し、「10/21の前段階蜂起の実現」に向け、一切を集中し、米前段階蜂起と労働者国家への介入を強め、在日党活動の基礎を、銃火器類の集中とその使用訓練等の蜂起の軍隊建設にかけ、革命戦線準備会は蜂起の兵站線として、独自の準備をしつつ、大衆闘争に対して武装蜂起を呼びかけつつ革命的に介入し徹底した党派闘争を展開する必要があるのだ。

我々はこのジレンマを、我々の思想と理論に忠実であることによつて、かつそれと一体の我々の革命的敗北主義という立場と体質によつてこのジレンマを10/21以降乗り越え、全てを蜂起に集中することによって革命の永続性（前段階蜂起に集中される「世界性と一國性」「党と軍事」の矛盾）を、「前段階武装蜂起—国際根拠地」「一國蜂起を世界革命戦争に飛躍せしめる蜂起の軍隊」の

連関に於いて決定的前進の地点を獲得した。そして、結局これ等の一切の前提こそが、大衆一國の政治過程の限界を世界武装プロレタリアート国際政治過程に於いて乗り越える「世界的地下組織の建設、世界赤軍」にあるということであった。

(d) げに、前段階勝利(全面的な体制間戦争、即ち、帝國主義國家と「労働者國家」間の戦争)これは帝國主義内部のプロレタリアー人民が粉碎され、労働者國家に於いて、スターリニストが勝利することが必須である以前に全ゆるる國家の崩壊と階級間の世界革命戦争が成熟する)が可能であるには前段階勝利の勝利を獲得する、経済的、政治的、社会的、軍事的諸条件が存在しなければならぬ。

これらは実に現代帝國主義の運動とその矛盾が、現象的には「労働者國家」の成立を基軸とする過渡期世界(本質的に世界武装プロレタリアートの登場)に媒介されて発現することによる。だからこそ、前段階武装蜂起の勝利の永続は、それ自身を発現せしめた、過渡期世界の世界武装プロレタリアートの実際の結合、即ち世界革命根拠地創出と不可分なのである。決して一國の経済的、政治的社会的条件とそれに規定された労働者階級の成熟度にあるのではない。正確に言えば、これ等は、過渡期世界全体の危機と世界武装プロレタリアートの成熟(「世界赤軍」世界革命戦線)に媒介され、これを中核とした一國の階級関係にあるのである。

② この原理的關係については、赤軍「Z」を参照せよ。

安保闘争の深さと拡がりを、日本資本主義の危機の深度のみ捉える一あるいは日本一國のプロレタリアートの成熟度のみで捉える一諸派は、決して武装蜂起のそれはと捉え切れない。又、それ故にこそ日本一世界プロレタリア、人民を真に革命的には指導し得ないのである。

安保闘争の規模、質は、明らかに日本ブルジョアジーの日本帝國主義、中国一北鮮一北ベトナム等労働者國家が存在する、としてこれと結合したアジア階級闘争の前進に規定され、かつこの諸環境のなかで、アジア一日本革命侵略に向け日米關係を改編しなければならぬ力量にあり、換言すれば、日本ブルジョアジーの力量が過渡期世界のプロレタリアートと米帝との闘争に勝利し得るか否かに一國の支配一被支配の關係を、國際的な帝國主義一対世界武装プロレタリア

論)ということから、自國の階級闘争の「國際的權威主義」と袂別した「自立した主体による自律した促進」々という立場をとっていた。

このことは、戦後新左翼運動の出発点でもあり、当然のことであった。何故なら、来るべき世界革命は、スターリン主義との袂別とその打倒を抜きには有り得ぬことが、第二次第三次世界革命の挫折の中で、余りにも鮮明に突き出されてきたからであった。にも拘らずこのことは世界革命の主体がスターリン主義の世界的打倒を、かつこれを通しての「労働者國家」の世界革命根拠地國家への転換の任務を排除するものではなかった。

世界階級闘争(戦後のそれは、ソ連と不可分離であった)や、労働者國家の階級闘争に介入することに比重をおくことよりは、この為にも、まずスターリン主義と分離した党主体形成と自國の階級闘争を強化することに比重をおいたのである。

これ等を通してしか、世界的スターリン主義運動との党派闘争にうち克つ方策がなかったからである。だがこのことは現代帝國主義一過渡期世界の階級闘争が、「労働者國家」の登場をもって世界史的变化を遂げ、世界革命情勢の形成の性格、形態を大きく変えていること、このことに反革命的であることがスターリン主義の発生根拠となっており、これを止揚する革命と革命主体こそが問われていることを対象的に捉えることを閉ざす可能性をもっていた。その歴史表現こそが、世界階級闘争の後退を主体的に受けとめるのではなく、スターリン主義の裏切りを掃き除く一國主義的な反帝反スター運動であった。又、これ等の反帝反スター、革共同運動に批判的に主体的に受けとめようとしつつも、にも拘らず力量の弱さから、単に一國の反帝世界革命主義にとどまっていたのが、共産主義者同盟等の反帝派であった。世界階級闘争に介入すること自体スターリン主義の敗北の党派闘争に終るが、拘束されているからである。このことよって、他帝國主義一後進国内階級闘争一労働者國家内の階級闘争に介入し、これを単一の世界プロレタリアートに至る世界革命戦争へと組織すること、その不可欠の媒介の環に「労働者國家」の世界革命根拠地國家への転換を従属せしめる党派闘争の必要性について、論理的に必要であることだけが確認され、實際は一國の高次の自然発生性を目的意識的に組織する意識性ともすれば一國革命主義に変質するそれ一に限定されて、世界革命戦争への意識性は、他國

に拡大し得るか否かにかかっているのである。このことは、言い換えれば、次のことを意味するのである。日本帝國主義のかかる國際的要請に経済力のみならず、すぐれて政治力に於いて応え切れないならば、逆に一國內の支配一被支配(「経済一國家」一支配階級としてのブルジョアジー、被支配階級としてのプロレタリアート)が転倒する可能性もっていることである。だから、決して、日本帝國主義の経済的力量に於いてからは、かかる安保権力再編をめぐる攻防の深さと拡がりは測定し得ないのである。今秋決戦の「蜂起の成熟」にも拘らず一國の指導に於ける非永続性」という問題は、実はすぐれて國際的要因(対米軍一対國際階級闘争)に規定されて存在したのである、それ故にこそ一國主義者には、この性格は解明し得ない。パラドックスに映ったのである。

又、それ故にこそ特異な権力再編をめぐる攻防へのプロレタリアートの勝利的方向は、國際的階級關係をして一國の階級關係に取り込むことよってのみ対応し得るのであり、今秋決戦で直面したパラドックス的ディレンマは、かかる観点からのみ突破し得るものである。

だから、世界革命戦争の勝利の戦略図に従った世界配置の下での前段階武装蜂起は追求されねばならないのである。だが、もともと我々は、六八年8/3集会(8/3論文)以来、このことについて結論し「世界赤軍一世界革命戦線」の路線を提起していたのであった。

だが、このようにして我々が実際に着手し得ていなかったが故に、大胆な、計画的な前段階武装蜂起に挫折したのであった。この樹根は、我々が「労働者國家」あるいはスターリン主義の問題に極めて曖昧な態度をもっていたことに帰着するのである。

我々の「過渡期世界の攻撃型革命論は、明確なかたちで労働者國家の「世界革命根拠地國家」への転換を主張してはいない。だが、実際にこれをどのように転換せしめるかについて極めて明確であった。そればかりか、我々は「労働者國家」スターリン主義の問題について、根強い「裏切り主義」を抜け切つてはいなかった。これは「労働者國家の変質はどうしようもないものだ」(対島忠行一赤色帝國主義論、トニー・タリフ一國家官僚制資本主義論、黒田ソ連

の革命的組織の成長を期待するか、その裏切りを弾劾するかにとどまっていたのである。一実際にこれに着手し、まず党的主体が國家と民族を越えて存在する關係を抜きにして。

これ等のことに實際着手することは、六八年10/8-11/12に於いてその必要性が自覚されつつも、いまだ六九年安保決戦一前段階武装蜂起の挫折を待たねばならなかったのである。又、これを、過渡期世界一攻撃型世界革命を實踐の革命論に高める手段でもあり、その主体を實踐的主体に鍛える段階でもあった。

我々は今、「前段階蜂起の貫徹」を核心点にしての、全世界のプロレタリア人民を単一に指導し、「労働者國家」を世界革命根拠地國家に転換せしめる世界黨の主体として我々の党建設を、外國にゆくことからは始めてゆくとしている。ここから、國際階級闘争一世界黨建設の分派闘争を、「世界赤軍一(前段階蜂起、革命戦線、社会的分派闘争の世界革命戦争の対峙の段階への単一化)世界革命戦線」として物質化することを開始せんとしている。これ等の事業を開始する歴史の意義は次のことを意味しているのである。第一に、世界革命の挫折とスターリン主義からの袂別として誕生した新左翼運動とその党主体が自覚することからこの自立を前提に、これを世界的に拡大する段階に到達したということがある。スターリン主義の世界的打倒を、世界革命の遂行との関連で不可避に要請したのである。この歴史的過程、日本階級闘争と共産主義者同盟の歴史に於いてその自立運動の集約一完成こそが、六七年10/8-11/12闘争であり、BUND第七回大会であったのだ。そして、その世界的過渡性、古い保守的残ガイの克服こそが、7/6に象徴される党派闘争と、今秋我々の前段階蜂起の挫折であったのだ。

第二に、これ等のことは次のような連関に於いて我々に把握されねばならない。日本階級闘争が、蜂起を要求することよって、世界階級闘争の前進と一体であるばかりか、その運動そのものである段階に到達した。他方、他國労働者國家の階級闘争も、先進国内の権力再編から引き起こされる階級危機を前段階蜂起に転換せしめるか否かが、自らの存亡としてかかり始め、自ら内部

の分派闘争を、この前段階蜂起と如何に結合関係を保つかが、焦眉の課題となり始めた。いかえれば、労働者国家のプロレタリア・人民の存亡が、帝国主義の反革命侵略戦争の危機下でスターリン主義と結合し屈服しなくても、革命的に存立し得る可能性を呈し始めたというのである。更に言い換えば、先進国革命主義と、世界各国の革命主体と実際の結合の客観的・主観的条件が成熟したことである。——e. x.、六八年世界階級闘争の高揚とケバラ、我々を頂点とする一国的各プロレタリア的敗北（一赤軍）の、「国際階級闘争の総括」参照。

第三に、かかる総体の集約として、前段階蜂起への前進と、その「世界性」と「一国的」性と「党と軍事」組織に於ける「一国的統制性」の矛盾点を「世界革命根拠地建設と一体の前段階蜂起」蜂起の軍隊「国際的地下組織」として、10/8—11/12に幾つかの諸論文（その多く、六八年共産主義者同盟関西地方委員会発行の「烽火」）8/3論文を経て、今秋決戦の「蜂起の成熟」にも拘らず、その「一国的非永続性」の只中に於いて革命的敗北主義の立場を堅持し闘い抜くことによって字びとつたのである。

何故に「前段階武装蜂起貫徹—国際根拠地創出」に武装された世界党—世界赤軍、蜂起の軍隊が必要なのか—現代帝国主義と革命の内的発展過程

④、我々は、今秋—前段階蜂起の敗北過程を、その基本点を対象化し課題に込めよう。

局地的反革命—侵略抑圧戦争をめざしての国家間—権力再編をめぐる階級危機は、「政治危機—武装蜂起」の動向を不断に形成すること。にも拘らずこの過程は「一国的武装蜂起の準備や」「武装蜂起」「内戦」「二重権力運動」等の蜂起のすりかえの方針では、武装蜂起を牽引し得ないことを確認した。一体の世界党—世界赤軍が前提されねばならぬことを確認した。一国的武装蜂起を追求する党派や、これを種々な言葉でごまかそうとする「戦術的」諸派では、武装蜂起は決して出来ないばかりか、なし崩しファシズムに粉砕されること。そして、一国的武装蜂起—擬似武装蜂起派は、

力状況が創出される訳でもなく、いわんや、十月革命の如く権力の一掃とプロレタリアの樹立がなされるわけでもない。まさにロシア革命の如く過程を可能にしたものこそソアール帝国主義の、帝国主義戦争下での経済的崩壊であり、これと前段階武装蜂起を可能とする条件は異質であり、極めて世界的経済政治危機に媒介された一国的政治危機であり、一国的規模での経済崩壊を根拠にしているものではない。経済的崩壊は、プロレタリアートが政治軍事的に勝利する過程での、主体的な社会革命を通して開始されるのである。それ故に、彼等は武装蜂起によって、政治的に一時的に崩壊こそすれ、経済的には崩壊せず、これを維持し、崩壊した政治的統合力を、これを基礎に国際的・反革命を導き、再建せんとすることである。

かかるブルジョアジーの対応は、下からの自然発生的なソヴェット—一国的プロレタリアの要求を、反革命同盟—局地的反革命戦争の国際的な擬制的展望と、反革命軍隊による軍事力を通して、世界プロレタリアに止揚することなくそれに包摂され、固定され、全体主義的のものへと変質させるのである。まさに前段階武装蜂起の出発点として、資本主義の上部構造—下部構造の、共産主義的—社会主義的のそれへの置き換えが、まずもって敵階級との死闘（連統的武装蜂起—世界革命戦争の攻勢）への勝利をもたせて開始されるのである。ロシア革命の危機の性格—革命の発展過程の性格と異なることによって自ら武装蜂起を牽引する「ヘゲモニー」の質は異ってくるのである。

だから、「政治危機—武装蜂起」を貫徹する武装蜂起の「ヘゲモニー」は、その頭初から、この武装蜂起の攻防をめぐってひきずり出される、労働者人民の分解過程での反革命ファシズム勢力との戦闘に勝利する「ヘゲモニー」を内包してない限り導けないのである。又、ソヴェット運動—プロレタリア建設を、「世界党—世界赤軍」を中核とし、限り、建設そのものも不可能となるのである。プロレタリアソヴェットに向いつつも、敵反革命の武装力に勝利することなく、ファシズムの「なし崩しプロレタリア—統制経済」の「経済的軍事化—反革命軍隊の構造的育成—排外主義労働運動（反革命戦争成金）—局地的反革命—侵略戦争」によって全面的な反動を受け、解体分解され、人民戦線運動を経てか否かに別にして、

一国的プロレタリアソヴェットの擬制的形態、ファシズム体制と対外反革命による過渡期世界の危機的擬制的止揚へと移行して行くのである。即ち、大衆の高次の

中途半端な街頭主義を経て、「人民戦線左派—生産点主義」に変質してしまふこと。武装蜂起は、世界革命根拠地創出運動と結びついた、世界党—世界赤軍を前提してのみ貫徹され持続されること。

我々はこれらの教訓を我々の経験から導き出したが、これは根本的には現代帝国主義が引き起こす危機の性格—革命の性格に起因するのである。結論から述べれば、③前段階武装蜂起の位置は、世界革命戦争の防禦段階の革命戦争のプロレタリア性、国民性、民族性を越え、同時に世界革命戦争の対峙—攻勢を経ての一連の世界単一の世界プロレタリアへの連続する行程の出発点であるということに於いてである。④そして、武装蜂起はロシア革命の如く、それが自然発生的に盛り込まれた一国的ブルジョア権力の打倒—一国的プロレタリアとして一国的支配—被支配の転換を経て、その総和が世界革命と世界プロレタリアを形成するのでは決していないこと。

あらゆる現代世界の武装蜂起が、世界革命戦争—世界プロレタリアの出発点であり、蜂起の成功とプロレタリアの樹立の一定の中間ゴールを経て再び世界革命と世界プロレタリアの過程が開始されるわけでもない。このような武装蜂起は実際にこの世界に存在しえないのである。言い換えば、前段階武装蜂起は一国的政治危機から生まれ、一国的矛盾を止揚せんとしつつも、それは世界の矛盾を止揚することを抜きには成立し得ず世界革命戦争の防禦から対峙—世界プロレタリアの準備をもつてしか斗われない限り実現し得ないであろう。

⑤この意味を現代帝国主義の引き起こす階級危機、プロレタリア人民の自然発生性と目的意識性、ソヴェット運動とファシズム等の関連で説明してみよう。ロシア革命の如く、一定期間の中間ゴールを経て、世界革命と世界プロレタリア革命として挫折しスターリニズムが生まれた。蜂起が世界革命戦争（対峙—攻勢）—世界プロレタリアの連続的行程の出発点として存在しなければならぬことや、又、ソヴェット—プロレタリアが一国的に存立し得ず、ただ唯一世界プロレタリアの過程としてのみ存立し得ること等の理由は以下である。

この前段階武装蜂起は、敵階級の密集した反革命（—侵略—抑圧—反革命戦争、なし崩しファシズム）を引き起こしこそすれ、一九一七年ロシア二月革命の如く、政治危機が持続し、ブルジョア民主主義政権が誕生し、平和的・二重権

自然発生性—ソヴェット運動は、登りつめつつ、その「一国的性格—根拠地をもたないこと」故に、連続的に世界革命戦争—世界プロレタリアに止揚されることなく反動的に再編されてしまふのであり、高次の自然発生性に伴った一国的（擬似）武装蜂起派は、この波にのみ込まれプロレタリア人民を導くことができないのである。これ等の革命の発展過程こそが、「政治危機—武装蜂起」の過程に内包され、これを先行的に直感的に感じることによって、六八派は大衆の高次の自然発生性によりまわされつつも、結局ロシア革命の同質の形態「日本帝国主義の崩壊的動揺—国際恐慌」という手前勝手な危機感をデッチ上げ、大衆のプロレタリア要求—世界プロレタリアの別々の側面—一国的・国民的ソヴェット運動に伴っていったのである。そして、この経路は、一国的・国民的であることによつて、実はファシズムに連なる性格のものであった。

かかる「政治危機—武装蜂起」に内包された「一国的プロレタリア—世界プロレタリア」の階級意識は「目的意識性の萌芽は、一国内部に於ける諸階級、諸階層の分裂と、国家・民族による疎外を、一国的プロレタリアに止揚せんとする性格と同時に、その一国的プロレタリアが別の側面に於いて、对国家間関係の対立を媒介しつつ、それが固定され、国民的のものに変質せんとするのに対して、究極の普遍—世界プロレタリアに於いて、階級的なもの、国家的、民族的なものと同時に止揚せんとする側面を内包しており、前者はスターリニズムの傾向を表現しつつ、ファシズムへと変質してゆくのである。そして、かかる共産主義的主体に於ける思想的水準は、絶対に蜂起を貫徹し得ないし、かくて、寄せ集め世界革命とスターリニズム的表現でもあるのだ。このような動向を跡づけた部分に墮落が生まれるのも当然であるのだ。

⑥以上、だいぶ乱雑に述べてきたが、要約してみよう。

①七〇年代局地的反革命—侵略抑圧戦争—体制間闘争に向けての国家間—権力再編の階級危機は、「政治危機—武装蜂起」状況を形成し「にも拘らず、その一国的主義的指導に伴う非永続性」を提出する。この特殊な前段階武装蜂起状況派は、ロシア革命の如く、帝国主義戦争の引き起こすロシアの経済的崩壊等と異っているものである。この階級危機は、第一に現代帝国主義が市場再分割戦—なし崩しプロレタリアを貫徹せんとすること自

体が、帝国主義間の抗争と国内階級闘争と一体の国際階級闘争への勝利と一体であることから形成され、第二にこの「侵略と反革命」の分裂は、一國の経済的力量では克服し得ず、これを局地的反革命戦争に向けて、政治的・軍事的・経済的力量の強化に権力再編を要求するところから形成され、すぐれて一國の経済的力量に規定されたものではなく、国際的危機一國の政治的危機に根拠をおくものであること。第三に、かかる政治危機が、日本資本主義の過去の、国独自の「財政金融政策をテコとする国内市場開拓型から、慢性的に累積した金融資本を、経済の軍事化をテコとしての、なし崩しブロック化しなし崩し統制経済への転換をもって、対外的に投下することに伴って形成されていた累積的構造的経済不満と結合していること、等に根拠をおいている。

経済的成長一彼らはその維持に、その政治が伴わないところから、現象的には、「政治一経済」一「国際一国内」へ危機が累積化していったものから、国家間一権力再編を不可避としたのである。

かかる危機の性格自体が、階級闘争の性格とその（蜂起）の指導の質を特異なものとしロシア革命をアナロジーすることは決して出さないものである。

②この階級危機に対して、労働者人民は、「帝国主義政府打倒」のローガンをかかげ、プロ独ソウイ、ネット運動をめざそうとする。これが全共闘、工群、地域共闘、地区反戦等の自然発生的質である。

だが、この「反政府ソウイネット」の要求は、この運動を引き起こした根拠そのものが、すぐれて国際階級危機にあることに對して、その闘争の進展は不可避に過渡期世界総体の階級危機の解決を要求するものに煮つき、転化されるを得ないが、にも拘らず、そのプロレタリアの解決を自覚し切れていないが故に、その質は頭初から「一國ソウイネット」世界「プロ独」一「一國ソウイネット」急進民主主義的、国民的団結の二重性をもっている。

かかる二重性は、攻防の進展を通じつつ、敵階級の「経済の軍事化しなし崩しブロック化」統制経済一局地的反革命侵略戦争準備一排外主義労働運動の育成一等のなし崩しの国際的階級危機に応えんとする動向が、経済的崩壊を根拠に進展されていくに従って、分解されてゆくのである。頭初のソウイネット一プロ独は、頭初の急進性を失い、国民的質に物化され、フアシズム運動に解消されてしまっているのである。

Ⅱ章 世界革命戦争戦略構想と七〇年前段階蜂起

Ⅰ 即目的前段階蜂起の敗北と世界党一世界赤軍一蜂起の軍隊の要求一国際階級斗争一国際共産主義運動の現局面

①六〇年代後半、とりわけ、六八一九年国際階級斗争は、国際階級斗争一国際共産主義運動に於ける黎明期であった。正に黎明期であるが故に、世界武装プロレタリアートは、その敗北を不可避としたのであり、と同時に、敵階級とその壮烈な死闘を最後までやり遂げる武器一世界党一世界赤軍一蜂起の軍隊を自らの体内に蓄積し、敗北のなかで獲得せんとしているのである。

ロシア革命以降、国際階級斗争は、世界革命戦争の疎外形態として存在したが、これ等は、六〇年代後半に於て、打ち破られ始めたのであった。そして、世界革命戦争の防禦段階を切り開いたのであった。だが防禦から、対時段階に自らが飛躍するには、老大な全ゆる種類の敗北と犠牲を蒙らねばならなかったのである。

世界革命戦争の防禦段階は、各国、各ブロック毎の個別的枠内で開始され、既存体制の打倒をめざしつつも、プロレタリア、人民が自らの突き進む道を理解し、これを導かざるに於て、無自覚であることに於て、先進国即目的前段階蜂起の敗北、後進国革命戦争の停滞挫折「労働者国家」の全人民的分派斗争の反動的展開と「労働者国家」間対立の激化として現れた。

この敗北を経て、現代帝国主義の局地的反革命侵略戦争一全世界侵略、抑圧反革命戦争の動向が全世界人民の上を覆い始めることを一体に、この敗北の総括をめぐって、真に革命的な世界的主体形成をめぐって、全世界に国際的分派斗争を引き起こしているのである。

これは実践的に言うこともなく、「軍事問題」をめぐり、「党の改組一組織問題」をめぐり全世界共通に提出されているものだが、これは、これ等の核心「一世界階級危機一政治危機」を如何に導くかをめぐって、現代過渡期世界の

かかる高次の自然発生的運命にこそ、六八八派は乗っかかっているのである。

③以上のことは、「現代帝国主義一過渡期世界」の特異な階級危機故に、日本プロレタリア人民の「既存体制打倒一日本革命」の要求が、敵権力の攻撃の質に規定され、危機をプロレタリア的に解決する国際的展望が間われること。即ち開始された革命闘争は、ただちに国際的性格を刻印され、国際階級危機の解決を問われ、それはまずもって、攻防に對する革命党の任務を、「既存体制の打倒の徹底化」と、他方での「危機の世界的解決」の兩者を、同時に止揚する出発点としての、即ち、国際的一国内的革命的武装勢力の形成一国際根拠地に媒介された世界党一世界赤軍一蜂起の軍隊の創出をめざす、前段階武装蜂起の貫徹に定めさすのである。

政治危機のプロレタリア的止揚としての、プロレタリアの既存体制打倒と、その世界的解決の二重の任務は唯一、前段階武装蜂起に於いてのみ唯一与えられるのである。前段階蜂起は、政治危機の「反政府一体制打倒一ソウイネット運動」の一國主義的限界を突破するものであると同時に、これを国際階級闘争に結節させ、危機の世界的解決に向けての出発点として存在する。

蜂起は過去の体制の打倒としてあると同時に、国際的攻防過程の一環として世界「プロ独」に至る連続過程の開始として二重の位置をもち、決して体制の打倒と危機の解決が一体としてある一國「プロ独」を固定的に押しはしないのである。国際反革命一フアシズムに對してプロレタリア人民の「プロ独運動は、国際根拠地に媒介された、世界党一世界赤軍一蜂起の軍隊をもつてのみ、プロ独運動の分解を、世界革命戦争一世界「プロ独」の機関へと再編し得るのであり、かかる観点を持たないソウイネット運動一プロ独こそ、形骸的なものになるのである。

革命の性格とその形態にゆきつき始めているのである。そして最も実践的なことに於て、各国、各ブロックの階級斗争の個性を越え、結合した、単一の世界階級斗争としての推進をめぐって、革命の「世界性」と「一國性」を止揚する国境を越えた、世界革命戦争の戦略構想で武装された国際根拠地建設と一体の単一の組織と単一の軍事組織の形成にゆきつきつつあるし、ゆきつきせねばならぬ。

②かかる事態の展開を跡れば以下の如くである。各国、三ブロックの階級斗争は、米帝の後退一ヤルタ体制の動揺を背景にベトナム人民の「不滅の革命戦争」に触発されつつ、先進国一仏五月革命、西独非常事態法闘争、米黒人・反戦闘争、日本一反戦・反安保闘争を引き起こし、他方、後進国に於ては、ゲバラ一カストロ路線に武装された一オラス路線を具体化し、労働者国家は、旧スタリニズムの「造反」を、左右の性格は別に、中国文革、チェコ問題として顕在化させた。

これ等は、その初期に於て、「反米帝・ベトナム人民支援」に於て、即目的に世界的であったが、他方での、帝国主義間対立とその勢力圏系の再編をめぐり、自国の階級の利害と結びつき始めた。平板な世界性が、帝国主義の動向に媒介され、一國的規模での深化を跡り始め、それは次の段階で再び、新たな質の世界性をもつて、再編成されつつあるのだ。

この過程になって、先進国の即目的前段階武装蜂起の波は、仏の五月を皮切りに、日本の「自国帝国主義打倒一安保紛争・ベトナム革命勝利」として聞われ、最終的に我が同盟の、今秋段階蜂起の挫折として終わった。そして米國にみられる如く、かかる即目的蜂起一軍事闘争一いままでのような形では持続されはしないことが、BPへの苛烈な強任に於て示されつつある。

第三世界では、ゲバラ等の中南米のゲリラ戦争を先頭にして、或いは、アジア、アフリカに拡大されつつやはり敗北した。中東では、ナセルイズムが崩壊過程に連入り、パレスチナ解放ゲリラの中から世界革命派が育ちつつある。メキシコの武装反乱は挫折した。

総じてゲジバラの殉教に象徴される如く敗北したのであった。更に、労働者国家では、キューバがOLASの国際根拠地としての役割を果たしつつもOLAS路線の挫折をもって、一時的な迂回策としての内政派一

経済再建に移行したのであった。

中国は、第三世界の即自的革命戦争の胎動の中で、いち早く自己の「ネール・スカルノ・ナセル・エンクルマ・ベンベラ等」の非同盟中立民族解放運動と結合する、バンドン五原則等の反米民族解放路線の破産を宣告され、国内政治危機をむかえ、文章―紅衛兵運動で、客観的に、世界革命根拠地国家への転換を迫られたら、反米帝―周辺革命略略故に国内統合を完成し得えずに停滞している。そして、現在毛路線の限界をもって、再度の実権派の胎動を準備させ、巨たな、世界革命派と中間派(毛特派)、ソ連派の全人民的分派闘争を胎動せしめつつある。

ソ連は、西独帝国主義の胎動、地方での西独帝国主義の没落過程からの、先進国前段階武装蜂起の波を指導し得ず、人民戦線路線を破産させ、この国際路線の破産から、東欧労働者国家の経済危機を官僚的に専制し得ず、ついに、チエコに反スタ、民族派を登場させ、東欧諸国に、西独帝国主義との結合派を生み出させ、他方非合法の左からの反スタ組織を地下に胎動させたのであった。これ等の混迷は、ソ連のチエコ武力制圧と、冷戦への転換を前提にしての、西独との「相互不可侵条約」の締結等、戦前のスターリン主義の跡った道を再び歩み始めている。そしてソ連官僚群は、この道を合理化すべく、「スターリン」の復権に大わらわであるのだ。

仏、西独、米、日本の「革命的左翼」は、新たな根本的分解を開始し、我々を除いて、新スターリン主義―現代カウチキ主義への傾斜を深めているのである。又、北ベトナム、北朝鮮、キューバ、アルバニア等の諸国は、極限的に、先進国前段階武装蜂起と結合するか、中ソと結合するかを選択に立たされているのである。

これ等の一見乱舞ともみえる、国際階級闘争―国際共産主義運動の動向は、次の如く整理されるのである。

①七〇年前後をもって、戦後米帝二元体制崩壊過程に進入し、且つ、西独のこれへの再編の動向が開始されることにより、現代帝国主義の周辺―心臓部への危機が進展し、局地的反革命―侵略、抑圧戦争の動向が全面化しつつあること、旧来のスターリニズムを分解させ、新たな党派を登場させたこと。

②周辺から心臓部に拡大しつつある危機に対して、旧来のスターリニニズム

に打ち克ち、世界革命の第二の道を統合することは、これを日、米、西独の前段階蜂起の貫徹によってそうすることが緊急の任務なのである。

③この項については、赤軍等のと合わせて参照されたし

＜I＞ 世界革命戦争の発展段階、世界革命戦争戦略図 と七〇年前段階武装蜂起

①戦後米帝一元の支配の上に形成された、ヤルタ体制の動揺は、米帝国主義の、対、日、西独帝との角逐、世界階級闘争との攻防に後退することから形成された。

そしてかかる戦後世界体制の動揺と再編の動向は、世界武装プロレタリアートに「既存体制の打破」を運動化せしめ、スターリン主義を分解させつつ、この闘争を導く、即自の主体を世界革命の第三の道派を胎動せしめた。

これこそ、世界革命戦争の防禦段階に見合う世界武装プロレタリアートの成熟段階であった。そして、これ等が、先進国心臓部での前段階蜂起の貫徹をもって、世界革命戦争の対時段階に引き上げられることも又、明らかである。しかし、この前段階武装蜂起貫徹には、これを、世界プロ独に導く我々主体の側に於ける世界的な準備をもってのみ、世界階級闘争は結合され、実現されることを、我々は再三にわたって確認してきた。

世界革命戦争を首尾一貫、世界プロ独に向けての発展段階の性格と、他方での、これと結びついた、世界プロレタリアートの成熟段階、配置関係から確定される必要がある。

②これは、帝国主義の侵略、抑圧―反革命戦争へ向けての発展段階の性格と、他方での、これと結びついた、世界プロレタリアートの成熟段階、配置関係から確定される必要がある。

我々が、最終的に打倒しなければならぬのは、先進帝国主義であり、とりわけ、米、日、西独帝国主義である。何故なら、これ等の帝国主義こそが、局地的反革命―侵略、抑圧戦争から、体制間戦争へと自らの矛盾を爆発させてゆく基礎固である。局地的反革命戦争―体制間戦争の国際階級危機が全面化して地点に於て、世界武装プロレタリアートは、当効国に於て武装蜂起をもって決起し、諸労働者国家は、これと結合し先進国へ、全面的な革命戦争の攻略を

と、即自の世界革命派との闘争は、危機に對して既存体制を打破することをめぐって、争われた段階から、局地的反革命―侵略、抑圧戦争に如何に対処するかに焦点を移行させつつ闘われていること。このことば、ベトナム革命戦争を震源地とする、世界革命戦争の波の周辺から、心臓部に波及しつつも、にも拘らず、仏五月―今秋安保決戦としてあった、一連の即自の前段階蜂起の波が挫折することによって、「後進国」―労働者国家の革命闘争が挫折し、崩壊の動揺を迎えつつ、ソ連の反革命性が全面化し、中国の文革運動が、中途半端に終わり、反革命派が、再登場していること。

③そして、国際階級闘争の最先端を担った即自の世界革命派や、革命的自主独立グループが、その敗北を如何に突破すべきかをめぐって真刻な党派闘争に進入していることを。

そして、その境界の突破の道が「プロレタリアの階級闘争を、「前段階武装蜂起貫徹と国際根拠地建設」を媒介にして、世界党―世界赤軍(蜂起の軍隊)創出に於てあることを対象化する段階へと到達せしめた。

後進国や労働者国家の革命的グループは「先進国の革命は、まだ遠い将来」という神話を、前段階武装蜂起が挫折したことは、その昂揚のなかで、期待をかけ始め、他方、中ソの経済的軍事的武装力と訣別して彼等の公然たる斗争を開始するか否かに立たされているのである。

そして、先進国の革命派は、「前段階蜂起の成熟と、その一国的非永続性」を体験するなかで、かかる労働者国家、後進国の革命派との結合を必然とし始めたのである。

④以上のことは、国際階級闘争―世界革命戦争の防禦段階が、次の対時段階にまで押しあげ、これへの飛躍を準備する、世界統一革命戦争を引きずり出し始めていること。

かかる地上の動向に對して、全世界の国際共産主義運動は「過渡期世界―攻撃型階級斗争」の理論で統合することを、可能と始めているのである。

我々に与えられた任務は、七〇年、日、米、西独前段階武装蜂起に向けて、「労働者国家」「第三世界」の闘争を、これに統合すべく、国際的な分派闘争にのり出すことであるのだ。かつて我々が、共産主義者同盟での連合派との分派闘争に打ちかつた如く、国際的にソ連派と、中国の経済主義的動向との闘い

開始しなければならぬ。アルバニアを根拠地とする西独に於ける武装蜂起を中核とする西独の総反乱とソ連への攻略、東欧諸国の反乱、中南米に於ては、米武装蜂起とキューバの大陸侵攻、アジアに於ける、日本武装蜂起と中国、北朝鮮等の日本攻略等の如く、この闘いは、世界プロ独に至る、党と赤軍に於てのみでなく、實際上戦闘そのものに於て、単一で、この攻勢的階級間戦争の過程こそが、世界プロ独―世界社会主義に向けての、経済―政治―文化一切の社会革命を伴いつつ展開されるものであるし、そうすることに、帝国主義者の再生産の根拠を根絶することができるのであるし、又、そうしなければならぬ。

帝国主義者は、国民経済から離れ、ただ弱さの反映として、同盟し、世界革命戦線に敵対するのである。

この様な、世界革命戦争の攻勢を開始するには、その対時段階に於て、先進諸国に於ける前段階武装蜂起を経過しての、世界党―世界赤軍―世界革命戦線の団結が形成されていなければならない。キューバ、北朝鮮、アルバニア等が世界革命根拠地国家に転換し、中ソに於て、旧スターリニニズム勢力に互する、世界革命戦争派が、プロレタリア人民を抱えていなければならない。対時段階での世界革命戦争は世界党と世界赤軍によって、完全に単一で、国際根拠地をもって闘われなければならない。これは一見、内戦という現象形態をとりつつも、そして、可能な限り、社会革命は推進されなければならない。

これ等の、世界党―世界赤軍を形成し内戦を持続させる物質的根拠は、全面的な体制間戦争への危機であり、故に展開される局地的反革命侵略戦争と、安保、NATOの反革命同盟軍の動向である。

この様な防禦―攻勢に向け、先進国心臓部での、七〇年初頭の一連の日、米、西独、仏、英等に於て前段階武装蜂起が貫徹され、帝国主義の弱さの表現として、国民的統合をみない時、ファシズムによる局地的反革命―侵略抑圧戦争が、米―ベトナム、朝鮮、イスラエル、中南米、日本―朝鮮、ベトナム、西独―東欧、仏に於て、引きずり出されなければならない。これ等の遂行過程と一体に、且つこの遂行を支えるものとして、防禦から対時を永続せしめる、世界革命根拠地として、キューバ、北朝鮮、アルバニア等が計画的に転換させられねばならない。

七〇年前段階武装蜂起は、かかる一連の前段階武装蜂起の突破口であり、世界革命根拠地国家獲得を目標とし、世界革命戦争の対峙への出発点であり、これを導く、実態的な世界党と世界赤軍（蜂起の軍隊）の完成でもある。

以上の如き、世界革命戦争戦略に武装されて、我が同盟は、全世界に七〇年日米、(西独)前段階武装蜂起を推進し、拡大されなければならないのである。そして、容赦ない国際的の一分派闘争を推進してゆかねばならないのである。

③七〇年前段階武装蜂起は、以上からして、世界革命の発展過程「世界革命戦争(世界プロ独運動)→世界社会主義とその性格に於て次のような位置を有するものとして扱われなければならない。世界社会主義に至る世界革命は、世界革命戦争の防禦「対峙」攻勢をもって発展する。

世界革命戦争の攻勢の段階は、防禦から対峙への飛躍としての結節「前段階武装蜂起をもって獲得された、国際根拠地、世界党、世界赤軍によって、これを主体の源泉として、各国のプロレタリア・人民が、敵階級のプロアズムム局地的反革命戦争の動向に対して、増々世界的に結びつけられ、一國プロ独建設「ソヴェト運動等の国民的階級性を、世界革命戦争として、世界社会主義建設の階級性として、自ら止揚する段階(世界革命戦争「種々な蜂起の質をもった戦略」)に於て敵階級が全面的な体制闘争を開始する前段階に於て、労働者国家の矛盾(体制闘争か、世界革命戦争か)をも止揚するかたちでもって、世界党と世界赤軍の計画性でもって、各国世界革命戦争と労働者国家内世界革命戦争とが統合し、先進国心臓部に於て、全面的総武装蜂起の勝利をもって開始されなければならない。これを結節として、世界武装プロレタリアートは、党と赤軍に於てだけでなく、プロレタリア、人民そのものによって、国境を越え、国家、民族を越え、名実ともに結合し、敵の階級基盤「資本主義国民経済を解体し、敵を根底的にせん滅する質、次の社会「世界社会主義を直接に準備する質へと飛躍せしめるのである。かかる世界プロ独を結節点とする、世界社会主義への、世界革命戦争の、一國に於ける、二つの武装蜂起を結節点として発展せしめられる過程を、世界武装プロレタリアートの階級形成の問題として、扱えれば以下である。

ロシア革命の成立と世界革命の挫折をもって、開始された、世界革命戦争は、世界武装プロレタリアートがその団結の中核点を、コミンテルン、ロシアを、全地球的規模で、ブルジョア社会の遺産を受け継ぎ、社会革命を開始する時点である。

それ故、世界武装プロレタリアートの階級形成論、世界党「世界赤軍」世界革命戦争として、「防禦から対峙」攻勢」を、結節せしめる前段階武装蜂起、世界総武装蜂起によって、完成されてゆくのである。

前段階武装蜂起を担う蜂起の軍隊は、既存体制の打倒をめざすのみでは蜂起は担えなく、蜂起をもって開始される、フアズムム「反革命侵略抑圧戦争の動向に抗し、一國ソヴェト」一國プロ独派の日和見主義勢力を打倒し、次の総武装蜂起に向け、前段階武装蜂起を世界党の、他國の無数の前段階武装蜂起の貫徹「労働者国家の世界革命根拠地国家と転換の闘いと結合して、徹頭徹尾持続せしめなければならない。

④我が赤軍派の、世界革命戦争戦略構想に武装された、世界委員会によって、日本前段階武装蜂起を突破口とする、一連の前段階武装蜂起は、次のような基本線とされるのである。

①日本前段階武装蜂起の貫徹をもつての、北朝鮮の左施回と革命根拠地化七二年武力統一の促進を媒介としての、日本全面武装蜂起との結合、かかる動向をもつての、毛林派の革命的変革「解体と中国の世界革命根拠地化、北ベトナムと結合しての、ベトナムのサイゴン攻略から東南アジアへの革命戦争の拡大

②アメリカ前段階武装蜂起と同時の推進とキューバの決定の革命戦争の拡大
国家「アメリカ全面武装蜂起と中南米蜂起」革命戦争・キューバ、米大陸侵略、とりわけ、この米前段階武装蜂起は日本前段階武装蜂起と同時に、これを引き継ぐものとして与えられなければならない。

③西独「仏前段階武装蜂起を基軸とする西欧諸國の一連の前段階武装蜂起とアルパニアを先駆としての、東欧諸國の左施回、ソ連スターリニズムとの全面的分派闘争の推進、かかる、世界革命戦争の防禦から対峙への飛躍を勝ちとるものとしての一連の先進国心臓部の前段階武装蜂起と北朝鮮・北ベトナム・アルパニア・キューバ等の世界革命根拠地国家への転換を担う突破口として、七〇年日本前段階武装蜂起が存在するのである。かつ、これを突破口として、革命的第三潮流は我々に世界党として統合され、真の世界赤軍は誕生し、日本の前段階武装蜂起は次の全面武装蜂起に向け、永続されるのである。

革命、一國ソヴェト「一國プロ独」「労働者国家」として、国民的民族的階級性に物化することによって、疎外され、世界を第三世界、「労働者国家」群帝国主義として現象せしめた。

だが、この世界革命戦争の顕外形態として存在した世界武装プロレタリアートの闘争は戦後現代帝国主義の危機をもって、世界革命戦争の防禦段階を開始せしめた。

これは、先進国に於ける、「安保、NATO粉砕、帝国主義政府打倒」とスターリニストレディーム打倒闘争であった。

これ等が、帝国主義とその補足物スターリニズムによって、粉砕される過程で、この矛盾を止揚する、党主体を世界武装プロレタリアートの頭脳として、国際「国内分派闘争として誕生せしめるのであった。この党主体は、前段階武装蜂起以前に於て、現実的で、地上的存在である。何故なら、これは世界武装プロレタリアートの、各国毎、プロッタ毎の個別性の枠の敗北の中でこれを止揚せんとする、量的な拮抗りとはもあれ「世界的に如何なる分派闘争にも普遍的であるから。

この党主体の獲得せんとする、蜂起の軍隊は、世界赤軍の萌芽であれ、その主体構成を主に党員によって、構成される如く、未だ地上的、実践的存在ではない。

だが前段階武装蜂起をやり遂げることによって、この蜂起の軍隊は、国際的根拠地をもつことによって、実践的には、フアズムム「局地的反革命」侵略、抑圧戦争の敵反革命軍に抗する、国民的、国家的階級軍団と結合し、その内部の、旧プロ独「フアズムムへ移行する勢力を粉砕し得るからである。だがこの対峙段階では、世界党「世界赤軍は、種々なプロレタリア・人民内部の、フアズムム派、一國プロ独「ソヴェト派を、現に帝国主義経済が存続し、敵権力を存続、再生産させ、局地的反革命戦争の動向がプロレタリア、人民を把えていることに対して、政治的に優位であれ、集約し得ないことと於て、我々の提起する世界革命戦争から世界社会主義への権力機関「世界革命戦争は未だ全人民包括性をもちない。これが、真に世界的権力機関として、成熟するには対峙から攻勢への飛躍の環「労働者国家の帝国主義心臓部への攻略と結びついた、全世界単一の総武装蜂起をもって、プロレタリアートが、敵から自由である段階に

第二章 七〇年前段階武装蜂起と世界委員会 —日本委員会の任務

①七〇年前段階武装蜂起の勝利の貫徹と、次の全面蜂起に向けてのその永続は、とりもなおさず直接的には蜂起の軍隊の建設にかかっている。だがその蜂起の軍隊は、前段階武装蜂起の世界的「日本に於ける、革命戦争を永続せしめる、基本条件と、そこから獲得される軍事的準備の問題にかかっているのである。

日本前段階武装蜂起の基本条件とは、米軍、自衛隊、機動隊の政治的軍事的解体である。これは第一に同盟「世界「日本委員会の国際路線の貫徹にかかっている。

米軍の解体は、世界「日本委員会と米委員会による米本国に於ける、ベトナム「朝鮮人民等と結合した、米前段階武装蜂起であり、かつ在日米軍の直接的な解体の準備である。

これに向けての準備は、キューバを根拠地に米の革命的左派「B.P.S.D.S左派等の変革「我々への結集である。

自衛隊の解体は、終局的に軍事的解体を確認しなければならぬが、政治的にはすぐれて、日本、プロレタリア、人民と南北朝鮮人民との政治的、軍事的、組織的結合にある。北朝鮮、人民の支援と、南「日本への侵攻を目標として、革命根拠地への転換は、日本前段階武装蜂起の永続にとって死活である。

又、中国の文革「紅衛兵運動が、中国の世界革命根拠地国家への転換も又、不可欠であり、これへの大胆な施回を欠くことによって、今中国は右からの再編成が進行し、毛林派は危機に立たされている。そして、この中国の右傾化、或いは解決なき毛「陸の内戦こそ、自衛隊の反革命的結果を強めるものである。日帝はこれに展望を託しているといつても過言ではないのだ。我々は、北朝鮮「中国で、我が同盟の活動を強めることによって、これ等の国家を日本前段階武装蜂起の、政治的、軍事的兵站線に転換せしめることを、決定的に進めねばならない。この上立って、自衛隊内への大量の同志を送り込み、蜂起の軍

隊との交戦時に向け、自衛隊内部からの反乱を実現することである。以上の如き、国際路線に媒介されてのみ、蜂起の勝利的貫徹とその永続は可能なのである。

これに向け、①日本を突破口とする先進国連統的前段階蜂起を牽引する、同盟赤軍派世界委員会が、緊急に世界各国、とりわけ、キューバ・米・北韓、中国に創出されねばならないし、これを統合する世界委員会から発足されねばならない。②世界革命左派の前段階武装蜂起統一線線が、七〇年夏までにつくりねばならない。

③米、西独に於て、前段階蜂起を、先進国革命派を胎頭へ我々に結集させ、軍隊を獲得し、もって日本前段階蜂起の先鋒をつけるものとして、その権力中核の攻撃を実現すること。

日本委員会、国際組織局は、かかる路線一方針を貫徹するべく、合法一非法法を問わず、非法法組織体制でもって、党員・軍隊の移動、武器弾薬の持ち込み、通信、船舶の確保、諸外国人のオルグ、外国党派等のオルグ、文書発行等を大規模に準備しなければならぬ。

次に、いうまでもなく、蜂起の軍隊建設である。この蜂起の軍隊建設の鍵は、第一に、武器の入手と訓練である。党とC.A.O.革命戦線は国際的一国内的規模で、全力をあげて、武器の入手とその訓練に全力をあげねばならない。党の創造性は、この武器の獲得とその使用にかかっているのである。第二に、この一定の蜂起の軍隊建設を楨杆に、四、五、六を蜂起の準備と軍隊建設に集中すべく、六八八共闘を武装蜂起統一戦線に再編し切ることである。

来春闘争を、平和デモで抑えるべき、そして、学生戦線から労働戦線に新たに軍隊建設運動を巻き起こすことである。第三に、学生、高校生、青年労働者を、自衛隊解体の軍事配置を確定し、大規模に自衛隊に入隊させ、自衛隊内反乱委員会を非法法に獲得すること。自衛隊基地からの武器獲得も計画されねばならない。第四に、全国、都道府県各地区に革命戦線準備委員会を結成し、蜂起の兵站部を拡大しなければならない。武器、財源、兵舎の確保、中央軍の予備兵形成、蜂起に向けての地区軍を革命戦線内に作り、軍事訓練を、全ゆる地区住民にゆきとこさせねばならない。又、革命戦線をして、局面的戦闘性へ押縮せしめることなく、武装蜂起体制をつくる環として、諸統一行動に介入し、

革マル六八八派との党派闘争を断乎として推進させねばならない。

④前段階武装蜂起は、10/21を前後する来秋に於て同盟、中央軍を基軸にして、地区軍、他党派軍団の結集をもつて、政府中核武装占拠一首都一全国一制圧として開始されねばならない。敵階級の指導中核の逮捕、機動隊の一歩的せん滅、自衛隊との対峙、自衛隊との交戦一自衛隊内部からの反乱等の中で、政府中核の武装占拠と首都の武装制圧の保持が一切の鍵である。これらを、それがいつまで続くかは今語る必要もないし、すべからず、全面総蜂起に向け、徹頭徹尾勝利的に継続せしめ、世界革命戦線日本と、世界党と世界赤軍の活動をもつて、敵権力の対極に獲得することである。首都制圧に於ける、国際的一国内的武器の確保、製造及び、政治犯の奪還は、最優先課題である。

⑤この過程にあつて、日本帝国主義権力はファンズムへ転換すると同時に、米軍と連帯しつつ、国内反革命とともに、朝鮮一対中反革命戦争への動向を急迫せしめらるうし、社会党・総評一公明党一六八八派の大規模な、武装蜂起派と人民戦線ソヴイエト運動派などの大分解放が生じらるうし、自衛隊内での反革命軍人対革命軍人の対立が深化し分解放が促進される。民社一同盟、宝樹一J.C等は戦争労働運動を公然と推進する本質をあらわにするであろう。

日共は、人民戦線の本流として、ソ連軍の支援を背景に、公然たる反革命に乗り出すであろう。この、ファンズムと我々との対抗関係に於て、人民戦線一ソヴイエト派が、ファンズムへと糾合されることを阻止し、これを左から分解放させるのは、我々の下に結合せしめる中心環は、⑥この衝撃的な影響をもつた、革命的な前段階蜂起の貫徹による、それまでの世界委員会の活動をより大規模化し、北朝鮮一中国の日本への全面的支援一参戦を目標において、北鮮の南進、中国の大規模な政治的、軍事的支援である。⑦米、西独等に於ける、日本前段階蜂起を引きついで、前段階蜂起の連統的展開である。

同盟赤軍派は、かかる蜂起の準備一貫徹一永続の最前線の最先端に首尾一貫して立たねばならないのだ。かかる、同盟赤軍派の国際的一国内的準備こそ、日本国内に於ける反革命ファンズムの逆流とプロレタリア人民の軍事的後退をはねかえす、世界武装プロレタリアートの主体一世界党一世界赤軍が獲得され、全面蜂起に向けての進撃が開始されるのである。蜂起前、世界党と蜂起の軍隊のみが、日本プロレタリアートの利益を世界武装プロレタリアートの利益

に於いて統一していったのが、蜂起を経て、国際根拠地と結合した、世界党一赤軍に大規模な、一國性から世界性に転倒した革命的労働者、学生、知識人、農民等の層が、世界赤軍一蜂起の軍隊に結集するのだ。

(一九六九・十一月二五記)

現代カウツキー主義一ソヴイエト運動主義、内戦主義者を粉碎し、

3月革命戦線(準)結成大会に結集せよ

70年前段階蜂起貫徹と革命戦線の任務

革命戦線は、世界党一世界赤軍に領導されつつ、世界人類自然史から眞の人類史への不可避の時代一世界革命戦争の時代に於ける、全てのプロレタリア人民の武装権力機関である。

革命戦線が、世界革命戦争の時代に、プロレタリア人民の武装権力機関として位置することには、当然、敵権力帝国主義ブルジョアジーのこの地球上からの一掃のために、生産、消費、分配を統制し、この下に人民が結合されていく過程であり、言いかえるならプロレタリア人民が敵権力に勝つために自ら、生産、消費、分配を組織していく機関であり、それ故、本来、プロレタリアの本質としてある社会性、組織性、主体性が回復される過程であり、世界社会主義への秩序的に形成されていくことを内包したものである。

ソヴイエトは、「武装蜂起の機関」であり「労働者階級の新しい国家の型」である。明らかにこれは、プロレタリアートの一國的団結形態でしかなく、プロレタリアートの国民的階級への転化の機関でしかない。革命戦線は、蜂起一世界革命戦争の武装権力機関であり世界社会主義への未来を実践的に内包したものでありプロレタリアートの国民的階級への転化と、それ自身の内在的發展止揚一世界階級への連統的、永続的転化の機関としてある。

ロシア革命以降の過渡期世界に於ける階級闘争は、三プロクックに分裂したその歴史的、個別的、過渡的存在形態を不断に単一の世界プロレタリアート一世界プロ独一世界社会主義一世界共産主義へと止揚する斗いとしてある。

そしてそれは、レーニン、ロシア革命の如く、ロシア革命の飛び火、波及連結、集合一世界革命としてあるのでは無く、ロシア一國革命を發展止揚する(ブルジョア国家の腐蝕と死滅しつつある国家の樹立)闘い、各国の革命や、革命情勢と世界プロ独へと止揚実現していく、プロレタリアートの世界プロレタリアートに向けた単一の革命闘争の時代、各国プロレタリアートの権力奪取の要求が、世界プロ独への質を内包したものであり、又そのことによつてしか成就され得ない時代の突入であり、世界階級闘争が不断に世界階級戦争、世界革命戦争へと転化することであり、又転化することをもつてのみ、勝利への前進があるということである。

事実、ロシア10月革命直後で、帝国主義のロシア干渉戦争一ロシア、ポーランド戦争として、それを端的に表現しているし、又第二次大戦後の、東欧一革命一中国「革命」の一連の「革命」にしても、ソ連スターリンград攻勢に於ける独の敗北、東欧に於ける、ユーゴ、チトーの人民解放運動の進撃、フランス、イタリアに於ける抵抗運動一バルチザン部隊の反撃と発展、中国、朝鮮、ベトナムに於ける抗日戦争と共産軍の発展等、帝国主義世界戦争内部か

ら世界革命戦争の土壤が成長し、その中で生成されてきた事実である。

(6)

これらのことは、レーニン主義の発展、止揚を要求している。一方でのプロレタリアートの国民的階級への転化は、各国の権力奪取の為の闘争と、他方でのそれ自身を止揚する世界的階級への転化は、プロレタリアの独りよがりな闘争の、同時的遂行と表現、その党一戦略、戦術一運動組織形態である。党は、一国的な革命闘争を越え、従って、更にプロレタリア独裁の国家を越えた単一世界党へと形成されねばならない。この世界党によって意識的に組織され、主導され、同時に、この世界党の物質的ヘゲモニーを体現するものとして、世界赤軍が組織されねばならず、そしてこれが、国民的階級一国的なプロレタリアソヴェエトへと、プロレタリア大衆を形成、組織して行くと同時に、これを不断に世界的階級へと発展止揚していく、最も高度な階級形成としてある。この世界赤軍一世界赤軍に領導され、主導され、媒介されて、各国プロレタリアートの革命機関、それ自身が世界的に結合され、国民的階級としてのプロレタリアートから連続的、永続的に単一の世界プロレタリアートの闘争に、その権力機関に止揚、発展されていくものとして革命戦線がある。

(7)

世界党一世界赤軍の存在をもってしてのみ過渡期世界に於ける革命闘争の勝利、世界プロレタリア社会主義への道がある。赤軍のワルシャワ進撃の敗北後、「世界革命の根拠地としてのソヴェエト、ロシアの防衛」一ソ連を中心とする「世界革命」へ、そして、「ソ連の国家防衛と国家政策を軸とする世界革命」へ、更に一国内社会主義論へと第三インターが変質、崩壊していったことは30、40年代の世界革命の敗北を必然とした。にも拘らず、世界党一世界赤軍のヘゲモニーがないまま、過渡期世界にあって「勝利」した「革命」の共通性は「前段階武装蜂起」一「武装根拠地建設」一「正規軍建設」一「労働者国家の根拠地化」(その時点で客観的にその役割を果たしたという意味で)の三つの要素が、無自覚であれ、自然発生的であれ、そしてゆがめられはされ、確実に、結合してのみ根拠地建設、それと結合した軍

事闘争として展開されたが、平和共存下での「労働者国家」と根拠地化としての客観的結合がなかったことに、その敗北の要因を持っており、現在展開されているベトナム革命も、54年ディエンビエフから、北ベトナムの根拠地化との結合が、その永続性と世界性を維持していることは歴史的事実である。そしてその何れもが、世界党一世界赤軍へと展開されることなく、一国的限界性を突破することなく、疎外され労働者国家として、ゆがめられ、歪曲されながら、その内部矛盾を累積、蓄積していつている。

(8)

世界党一世界赤軍のヘゲモニーがないままに、過渡期世界に於て「勝利」した「革命」が「前段階武装蜂起」一「武装根拠地」(殆んど外国に於て)一「労働者国家の客観的根拠地化」をもってあるということから、我々がこの道を歩まねばならないということではない。だから、蜂起もできないのである。ただ確認しておけばよいことは、過渡期世界に於て一国内に於て「権力奪取」を闘おうとする場合でも、この三要素が結合されてはじめて可能になっているという事実である。(B・中核・MLの一国内革命論者が、この歴史的事実をみていない。だから、蜂起もできないのである。)

(9)

そして我々にとっては過渡期世界に於ける世界プロレタリアートの直接的任務が、一国的権力奪取一プロレタリアのみに於けるのではなく、そのこと自身を内在的に止揚、発展させ、世界革命戦争一世界プロレタリア社会主義への運動としてある以上、そのことを可能とする世界党一世界赤軍を現在から建設、着手していかなければならず、それ故日本に於て我々が展開しようとする前段階蜂起は二重の意識性を必要とするのである。前段階武装蜂起の歴史の必然性とその根拠、その世界革命に於ける位置は以下の通りである。

第一に、過渡期世界の矛盾の展開を根底に於て法則性として規定しているのは、現代帝国主義であり、現代帝国主義の全世界的矛盾の成熟と展開過程は過渡期世界のプロレタリアの存在形態を危機に陥し入れ、その内的矛盾を成熟さ

せ三ブロックの歴史的個別的過渡性の解体か、その止揚かを暴力的に決着付ける時点で逢着すること、そしてそれはプロレタリアの世界的な暴力闘争を必然化し、ブルジョワ世界の暴力の攻撃へと引き入れつつも、自然発生性それ自身で解決し難い危機に逢着すること。

第二に、この過渡期世界の危機が階級危機として発現し、煮つまる時点は世界プロレタリアートの世界革命戦争という側から見た時、防禦から対峙一攻撃へと転化されるべき時点である。

第三に世界革命戦争の防禦段階とは、帝国主義の論理が貫徹している段階であり、「労働者国家」もそれに規制され、規定されているのであり、それ故、防禦から対峙一攻撃への移行は帝国主義、とりわけ列強帝国主義に於けるブルとプロの攻防を逆転せしめることであり、いかにあるなら、列強帝国主義のプロレタリアートが世界プロレタリアートとして登場することでなければならぬ。

第四に世界プロレタリアートとしての登場一世界革命戦争を開くプロレタリアートとしての登場は、各国毎に於ける蜂起を目的意識的に貫徹してのみ可能となる。

第五に、何故なら、階級危機として煮つまる時点とは、権力闘争の時代であるということであり、それは蜂起をもってしてのみ、全てのプロレタリア人民を組織しうる時代を意味するのであり、同時に、自己のプロレタリア権力の樹立を追求することを媒介してのみ、その各国プロレタリアートの一国的、民族性の止揚があるのである。

第六に階級危機であるということは、未だ全社会的危機が未端まで形成されているということの意味するのではなく、戦争一権力をめぐって、ブルとプロの攻防を全面的に開始されるということに他ならない。

即ち帝国主義ブルジョワジーは侵略一抑圧一反革命に向けて、乃至はそれを展開しつつ、プロレタリア人民を組織すべく、権力再編を展開するのであり、このブルの攻防の中で、プロレタリアートを不可避とするのである。このブルの防内には持統的軍事闘争を不可避とするのである。

(国内的にも軍事闘争が、持統的、永続的に闘われていくために、軍事根拠地が必要とされるのであり、それが殆んど外国に求められざるを得ず、なお

かつ、その外国武装根拠地と結合した国内活動がありうるのは、その国内のプロレタリア人民がそれを受けつける主体一世界プロレタリアにならなければならない。過渡期世界の革命にあつては、このことは、それ故、前段階武装蜂起と外国根拠地建設は不可分一体なものであるであり、キューバ・中国・全てその例を示してきたのである。)

第七に、この前段階武装蜂起は、意識的には世界同時蜂起を追求するが一そして階級危機が世界的に展開されるが故にその根拠もあるが一未だ(プロレタリアートにとって、防衛の段階にあることからして、ブルとプロの攻防のヘゲモニーが敵権力にあるのであり、それ故、帝国主義の攻撃は反革命同盟を通して、世界同一性を不断に形成しつつも、その本質としてあるの不均衡発展は、各国階級闘争の不均衡性として、同時に、階級危機の時代にあつて、帝国主義国家が崩壊しているわけでないから、増々、民族国家としての支配の論理を貫徹させようとするが故に、権力闘争に煮つまっていく時点で、各国階級闘争の歴史の実段階に依拠せざるをえず、前段階蜂起はその意味に於て、各国に於て貫徹されていくのであり、その各国、とりわけ列強帝国主義の蜂起の貫徹を通して世界プロレタリアートとしての登場が、防禦から対峙一攻勢への時代になり、世界党一世界赤軍の下での文字通り世界同時蜂起へと発展せしめていくのである。)

第八に、我々が貫徹せんとする前段階武装蜂起が二重の意識性があるということ、各国の蜂起そのものが、本来的に意識的に形成されて始めて可能であるということのみならず、我々は自らの前段階武装蜂起を貫徹するだけでなく、自らを世界党一世界赤軍に高め全世界全てのプロレタリア人民の蜂起一世界革命戦争一世界社会主義一共産主義への道を切り拓いていく、唯一の主体としてあるという世界的地位である。

(10)

現在のソヴェエト運動主義者は、生産点主義、経済主義、アナルコサンディカリズム、一般的内戦主義に転落し、武装蜂起そのものを貫徹せず、蜂起の主張そのものを放棄するに至つていく。何故なら、過渡期世界の危機が階級危機として発現し、煮つまっていくとい

うことは、決して、帝国主義国家の全面的崩壊と、全社会的末端までの壊滅的状況として進行していることを意味するのでなく、戦争―権力をめぐったブルとプロの長期の攻防としてあるからこそ、ロシアソビエト革命のイマジ国家、社会の全面的崩壊―プロレタリアートの自己権力樹立、及至は一国的蜂起過程―社会革命の過程―ソビエトVをもつかり、自国帝国主義が帝国主義戦争に敗北し根底から崩壊するまでは、蜂起の時期はないのである。

(14) 現在、生産点主義に陥っていないにしても、かかる軍事闘争が持続し、永続性と世界性をもつためには、外国武装根拠地との結合をもってしか、客観的にはありえず、そしてそれと結合は、前段階武装蜂起―世界プロレタリアとしての成長をもつてのみある以上、当然、その内戦は、最終的には限界に至り、生産点主義に転落する。

(15) 現在のソビエト運動主義者は、言いかえるなら、一國革命の総和―世界革命、乃至は、プロ独総和―世界プロ独であることからして、蜂起―世界革命戦争―世界社会主義の時代に、世界党―世界赤軍に敵対して、下からのプロレタリアの内在的論理、民族性、国民性を主張し、更には、最終的には、労働者国家のスターリニストと結合して、反革命的行動を展開するであろうことを、明確に、確認しておかねばならない。

(11)

現在、このソビエト運動主義者こそ、解体させていかねばならない。日本に於ける六十年安保―六十年代階級闘争は、レーニン主義の復活と、その実践的止揚の時代であった。スターリン主義を根底から批判し、レーニン主義の世界革命、暴力革命を復活させた党派によつてのみ、六十年代の階級闘争を牽引し、飛躍させてきたことは、歴史的事実であり、そして、その歴史的实践は、記念碑的位置として、世界史に刻印されるべきものである。だが、史上三度目の市場再分割戦が、侵略、抑圧反革命戦争への開始、なし崩しファシズムへの進行は、レーニン主義の止揚、前段階武装蜂起―世界革命戦争―世界社会主義、世界党―世界赤軍―世界革命戦線をもつてしか、世界プロレタリアートへの前進がない時代への突入である。

レーニンの時代に於る、排外主義、民族主義者としての社民は、現在のスターリニスト日共である。

その下の、軍事産業に自らの展望を見出し、それ故、国防―自衛隊強化等々に積極的に協力する国家の運動体として位置するか(IMF-JIC、鉄鉱労働等々)それと根底的に対立するかの何れしか、選択の余地がない時代に入ってきたからである。

(12) 反戦派労働者は六十年代後半、多く増加し、言わゆる「新左翼」が、階級闘争の主流として登場せざるを得なかったのはこの為であり、当然である。だが、それは、あくまでも、過渡期世界の危機、階級危機の時代にもつて。高次の自然発生性、そのものでしかない。この高次の自然発生性を身をもって体現し、そのことによつて、全てのプロレタリア人民の先駆をなしてきた諸党派が、今ソビエト運動主義者として路線をもつて立ち現われる時、高次の自然発生性を押える部分に転落し、蜂起―世界革命戦争に最も鋭く対立する党派、レーニン主義の教条化―スターリン主義として登場することは不可避であり、これを解体することなしには、全てのプロレタリア人民の獲得―蜂起貫徹はない。レーニン主義の「常識」を克服することなしには、先進的大衆の獲得はないのである。

(12)

六十年代後半、確実に、前段階武装蜂起―世界革命戦争の時点を告げてきた。

米のヴェトナム反戦闘争、黒人運動、仏の五月革命、独の非常憲法闘争、伊の慢性的政治危機、日の安保闘争、ヴェトナムを頂点としたアジアパレスチナ解放戦線を中心とする中近東、そしてOLAS等々、又、中国文化大革命、チエコの反戦、ソ連の進軍等々、日本にあつては、より意識的に具体的に、六八年10/8、六九年10/21、そして東大闘争を頂点とした全共闘運動にと、権力闘争時代への突入である。戦争―権力を巡つた、長期の攻防への突入である。これまでの全てのプロレタリア人民の闘争組織は、この時代に向けて、

(13) (蜂起―戦争に向けて) 新しく衣がえしなければならぬ。十一月安保決戦で明らかにしたように、全ての闘争組織が古くなってきているのである。組合、自治会は勿論、全共闘、反戦も全てそうである。現在から、自らを権力としてゆかねばならないのである。

(14) これが、革命戦線(準)である。故に、革命戦線(準)は、自治会、全共闘、反戦等々のプロレタリア人民の全てのこれまでの争う組織に対する、民青同、社学同等々の政治組織としての関係にあるのではなく、これまでのプロレタリア人民の闘争組織そのものが、革命戦線(準)に改組されていかねばならないのである。又、その様に促進させねばならないのである。同時に、革命戦線(準)は、あくまで原則として、個人加盟の組織である。何故なら、団体加盟が許されるなら、古い組織が、そのまま残されるからである。

(15) 現在革命戦線が、革命戦線(準)として組織されていくことの意味は、明白である。前段階蜂起を貫徹してのみ、日本プロレタリアートが、世界革命戦争を闘える主体―世界プロレタリアートになり得るのであり、同時に、又、それ故、世界党―世界赤軍が実体として登場するのであり、このことを通してのみ、世界党―世界赤軍に領導された世界革命戦線の時代の武装権力機関として、又実体を持つからである。

前段階武装蜂起世界革命戦争に向けた革命戦線(準)の活動、任務は以下である。

共産同赤軍派の国際分派闘争―世界党建設と結合した蜂起の軍隊建設(現在の赤軍) それに媒介され、領導されながら、全ての活動を蜂起に集中することである。

(17)

R F(準)は広すぎて、広すぎることはない組織である。その活動領域は広ければ広い程よい。ただ明かに権力と結合していたり、反革命・スパイであること等々がはつきりしている場合、その部分を除外するだけである。

前段階武装蜂起世界革命戦争に向け、何らかの形で参加しようとしている全てのプロレタリア人民を組織しなければならぬ。その階級意識の不均等性は、蜂起に向けた任務配置によつて、止揚されていかねばならない。遅れた大衆も全て、R Fの中に参加させ、その活動を通して鍛えられていくのである。

闘争の頂点で軍事闘争を闘う軍団としてあった。だが六八年10/21↓4/28↓六九年安保決戦を経た現在、大衆闘争の頂点での軍事闘争の展開ではなく、大衆闘争から全く分離した地点から世界革命戦争↑蜂起の外国根拠地建設と結合した軍隊によって、まず、蜂起が開始されねばならないこと、それ故、蜂起の軍隊は、世界革命戦争↑蜂起に政治的に武装された、均質の、統一した高度の階級意識をもっていなければならず、一点の不純性もない軍隊が、建設されねばならないことであり、又一方では大衆の末端まで蜂起に向けて組織されねばならない時点の到来であるからこそ、党派の軍団として中間組織（先進的活動家集団）という一般性、中途半端性での階級形成、分離はなしえなくなったためである。

(18)

R Fは武装権力機関であることからして、当然、産別組織ではなく、全人民が組織されねばならず、地区を土台にしてある。なおかつその地区制はR Fは敵権力との闘いで勝つことの一点に集中することをもって成長するものである以上、その蜂起へ向けた。軍事戦略にもとづいてなされなければならない。そしてその下にR F地区委員会↓支部委員↓班として組織される。

(19)

R F（準）造りは急がねばならない。11月前段階武装蜂起の敗北は、このまま放置されるならば、日本プロレタリア、人民の度量なる敗北、それ故、世界革命戦争の後退をもたらさずにはおかない。中核・MLに代表される様に見えるの党派が勝利として総括し、大衆の自然発生性とそのまま結合して、突撃のみを怒号し、それ故、武装解除したまま敵権力に全面的に粉砕されようとしている（6月決戦云々）。今問われているのは、ゲバ・ビンで闘う部隊を量的に増加させることではなく、ゲバ・ビンでは聞えないのであり、統から全ての武器をもって、蜂起へと結集し、貫徹することのみをもって新しい地平へ出発しうるのであり、そのことをなしうる主体をつくることからまず開始しなければならぬのであり、そのことをもって権力との攻防を攻撃的に領導しなければならぬ。

我々は世界党―国際根拠地と結合した蜂起の軍隊と結合して、大衆の末端までそのことを組織していかねばならず、その党派闘争を全てのプロレタリア・人民をまきこんで組織し、3月革命戦線結成大会を勝ち獲り、春、4〜6月闘争に於て11月の二番煎じになることを断固阻止し、全てを秋―前段階武装蜂起へと集中していかねばならない。

全てのプロレタリア・人民が革命戦線に結集することを呼びかける。
(一九七〇年一月一日)

赤軍

共産主義者同盟赤軍派
政治理論機関誌

赤軍 No.4, No.5 発売中!

No.4

¥300

No.5

¥200

綱領確立のために (I)

—過渡期世界とプロレタリアー党—

第一章 現代革命論への方法的視点

第二章 世界史的階級闘争の段階としての過渡期世界, その二つの歴史的普遍性

第三章 現代帝国主義—現代帝国主義国家

第四章 過渡期世界—その歴史的展開

前段階武装蜂起—我々の敗北の教訓

—国際根拠地—蜂起の軍隊—地下活動—

I 前段階蜂起と世界革命戦争

革命の教訓 <I>

II 蜂起の準備とその開始

革命の教訓 <II>

書店 (東京) ウニタ書店, 文献堂, 谷書房, 都丸書店, (京都) 三月書房, (大阪) 曾根崎書店,
連絡→東京都新宿区柏木 2-276 福田常雄 TEL. 03-369-2380

共産主義者同盟赤軍派
政治理論機関誌

赤軍 No.6

発行 1969年12月27日

価格 200円

連絡先 東京都新宿区柏木

2-276 福田常雄

TEL (03)369-2380